

ISSN 2758-9579

2022
創刊号

歴史資料室
年報
-2022-

公益財団法人

たましん地域文化財団

ごあいさつ

財団法人たましん地域文化財団は、1991(平成3)年4月に設立し、同年6月に歴史資料室が開設しました。当財団は、多摩信用金庫の前身である多摩中央信用金庫が1974(昭和49)年から行なってきた社会貢献事業を継承するため、地域の文化形成に寄与することを目的として設立されました。翌年の1992(平成4)年8月には、たましん歴史・美術館として東京都教育委員会により登録博物館となりました。法人制度の改革にともない、2012(平成24)年4月には財団法人から公益財団法人へ移行しました。

歴史資料室では、多摩中央信用金庫が行ってきた『多摩のあゆみ』の発行と歴史講座の開催を継承するとともに、長年かけて収集・整理してきた図書・雑誌・地図・絵葉書・チラシ・ポスター・写真などの地域資料を、広く一般市民や研究者へ公開しています。また、2001(平成13)年5月にホームページを開設して、『多摩のあゆみ』の総目次や所蔵資料の検索システム、歴史講座のご案内、デジタルアーカイブの公開などの情報発信にも努めてきました。

この度、あらたに歴史資料室の年報を創刊することとしました。本年報は、歴史資料室の活動内容をより詳細に記録する内容となっております。年報は継続して発行していく予定ですので、今後とも歴史資料室の活動にご高配をいただければ幸いです。よろしく願いいたします。

2023年8月吉日

歴史資料室

所蔵資料の紹介

凡例

- ・ 歴史資料室の寄贈資料・購入資料を紹介します。
- ・ 資料は種類別にして、分類番号・資料名・作成者・発行年・サイズ（単位はmm）などを記しました。
- ・ 資料の閲覧、資料画像の利用・転載などに関しては、歴史資料室までお問合せください。



■ 図書 39-68A (部分掲載)

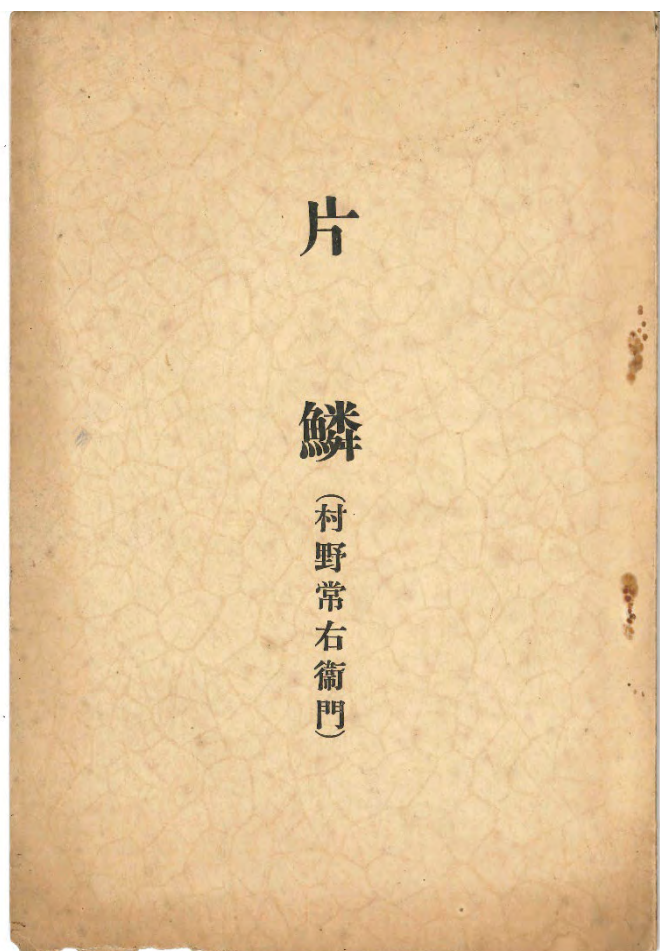
甲武鉄道会社編『甲武鉄道もより名所案内』

金港堂本店 1890 (明治23) 年

サイズ：190×120

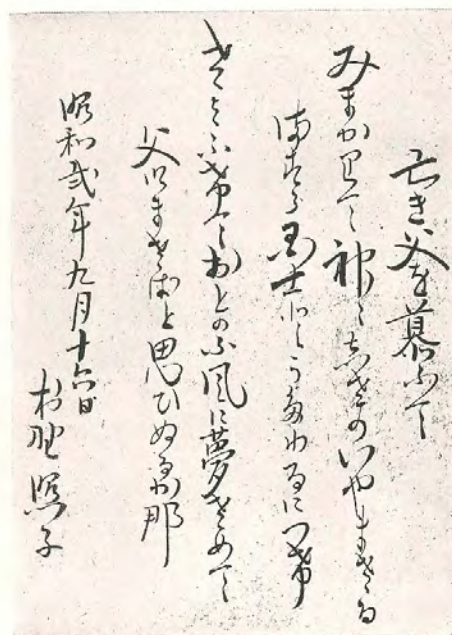
中野、境（武蔵境）、国分寺、立川、八王子の各停車場周辺や、羽村堰、青梅町、高幡不動などの名所・旧跡を挿絵とともに紹介している。





- 図書 00-21 E (部分掲載)
村野国三郎『片鱗(村野常右衛門)』
1927 (昭和2) 年 10頁
サイズ：220×150

村野常右衛門は、1927 (昭和2) 年7月30日に享年68歳で亡くなった。常右衛門の娘婿国三郎が編者となって、常右衛門の言動をまとめたもの。



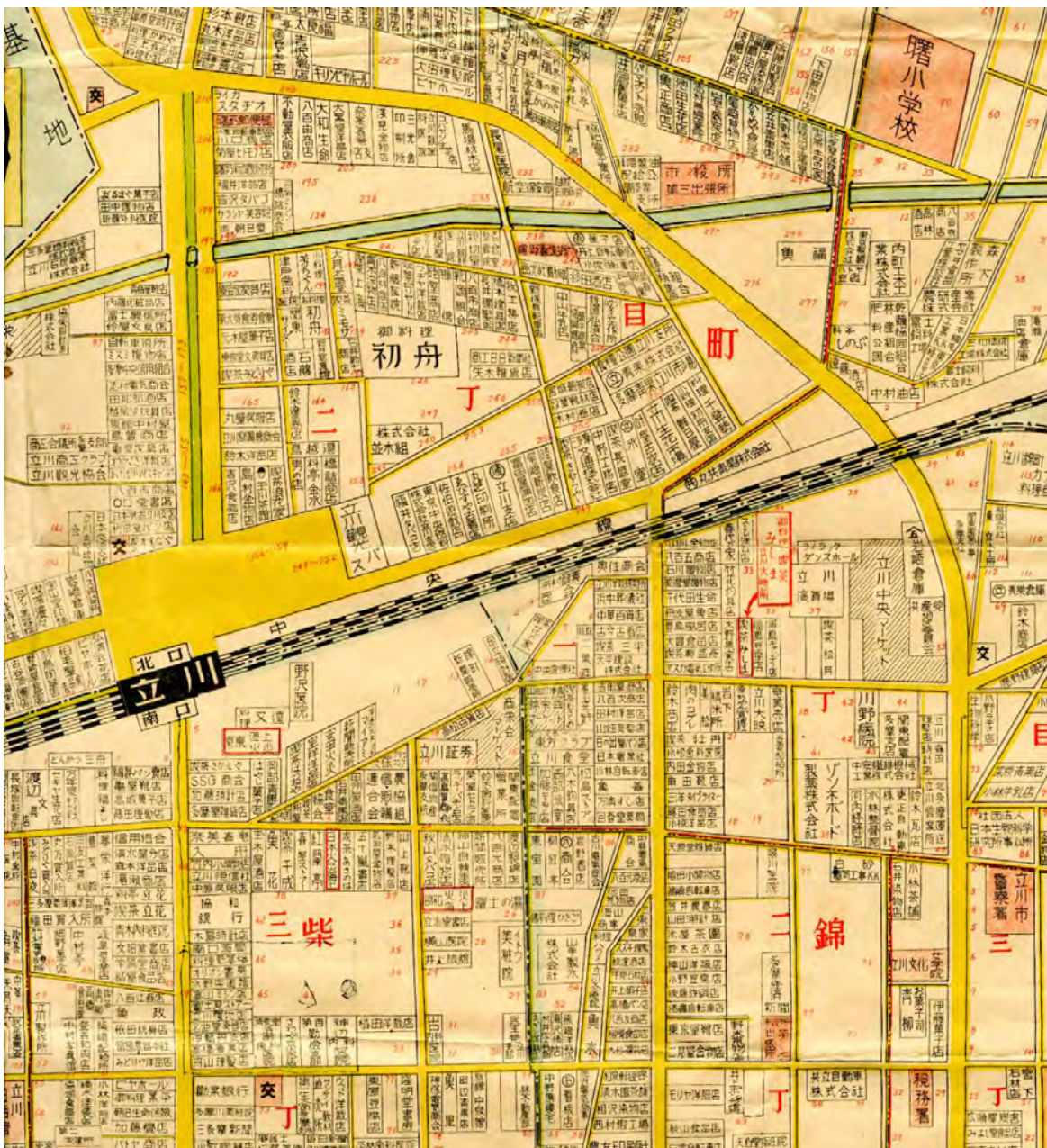


■地図 MB002-035 (部分掲載)

立川市商工業案内図 多摩文化社

1949 (昭和24)年 サイズ: 790×1095

終戦後の立川駅北口と南口にあった店舗名が詳細に記されている。数多くあった映画館をはじめ、会社や学校、警察署、郵便局、役所などの場所も判明する。



■地図 MB015-006 (部分掲載)

国立町国立地区図 1/4500 羽衣堂 1953年 (昭和28)

サイズ : 545×785



国立町のうち、北部の国立地区のみを表示したもの。発行は立川市羽衣町の羽衣堂で、非売品とある。1952 (昭和27) 年1月に国立地区は文教地区に指定施行されるので、それと関係した地図であろうか。

■ 絵葉書 001-589～592

武州高尾景勝 神保朋世画伯筆
東京府山林会



001-589 雨後の高尾（御衣公園より）



001-590 夏暁の薬王院（境内の大杉）



001-591 秋の尾根道（見晴台より）



001-592 浅川の秋風（栲田門より）

御衣公園は1937（昭和12）年に開園しているので、この4点は昭和10年代の風景絵葉書である。神保朋世は、野村胡堂「銭形平治捕物控」（『オール読物』連載）の挿絵を描き続けた画家として著名。東京府山林会発行の絵葉書は、奥多摩を描いた4点も所蔵している。

■チラシ 002-025

瑞祥壽呉録 立川新聞販売組合 1936（昭和11）年

サイズ：789×545



立川新聞販売組合が昭和12年元旦に配布した。立川町の発展を寿ぎ、振出しから上りまで商店と会社が双六形式で記されている。

【注目ポイント】

同名の資料が『新編立川市史 資料編 地図・絵図』（91頁）に掲載されている。双六形式の図案は同一のものだが、各コマ内（振出し・上り・1～34）に記載された「店舗名」「宣伝文句」、欄外の記載は全て別店舗が記されている。当室所蔵の「瑞祥壽呉録」と比較することで複数のパターンを作成・配布したと推測できる。

■チラシ 016-001

女子従業員大募集

大日本時計株式会社田無工場

サイズ：180×255

女子従業員大募集

所在地 東京都北多摩郡田無町一、六五〇番地
電話番號 田無二九・一一八・一四六番

會社工場名 **大日本時計株式會社田無工場**
代表者 工場管理人 栗 山 三 治

一、設立 昭和五年五月

一、經營組織 株式會社

一、營業種目 兵器、精密工作機械、刃工具
腕時計同部分品

一、募集要領

1 募集人員 女子工員〇〇〇人
男女事務見習 〇〇〇人

2 募集地域 東京都、埼玉縣、山梨縣、
福島縣、宮城縣、山形縣、
秋田縣

3 採用條件

イ 學 歴 國民學校高等科卒業程度
及 年 齡 格 健康ナルモノ

ロ 體 格 健康ナルモノ

ハ 職 務 各職種及會社一般事務

ニ 通勤又ハ 住込ノ別 何レニテモ可

ホ 勤務場所 東京都北多摩郡田無町一六五〇
大日本時計株式會社
田無工場

勤務時間 自四月一日午後七時
至十一月一日午後四時半
自十一月一日午後七時
至三月三十一日午後五時
休日は毎週日曜及四大節
會社創立記念日

及公休日

一、會社沿革 昭和五年五月創立以來再三ノ擴張ヲ爲シ、腕時計、精密機械、刃工具等ノ
製造ニ從事シ來リタルモ聖戰勃發ト共ニ陸軍監督工場ニ指定セラレ兵器部
品ノ製作ヲ開始シ今般陸海軍管理工場ニナリタリ

一、位置交通 西武電車田無驛下車徒歩ニテ七分

4 採用方法

イ 申込所 飯能國民職業指導所

ロ 提出書類 自筆履歷書

ハ 銓衡日 毎月二十四日

ニ 銓衡方法 面接(出張銓衡)

ホ 受験手當 旅費實費及辨當料(五拾錢)支給

ヘ 採否決定 即日決定

ト 赴任時期 採否決定次第通知

チ 赴任旅費 三等旅費全額支給

5 福利施設

イ 宿 舎 完備

ロ 共濟組合アリ

ハ 醫療施設 完備

ニ 其ノ他 娛樂施設完備

受付指導所 飯能國民職業指導所

東京一八二

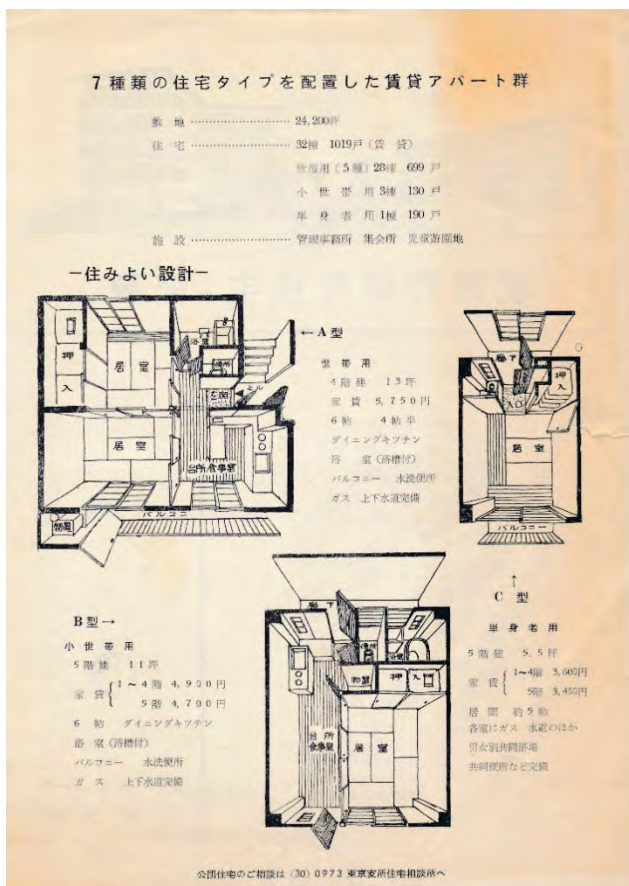
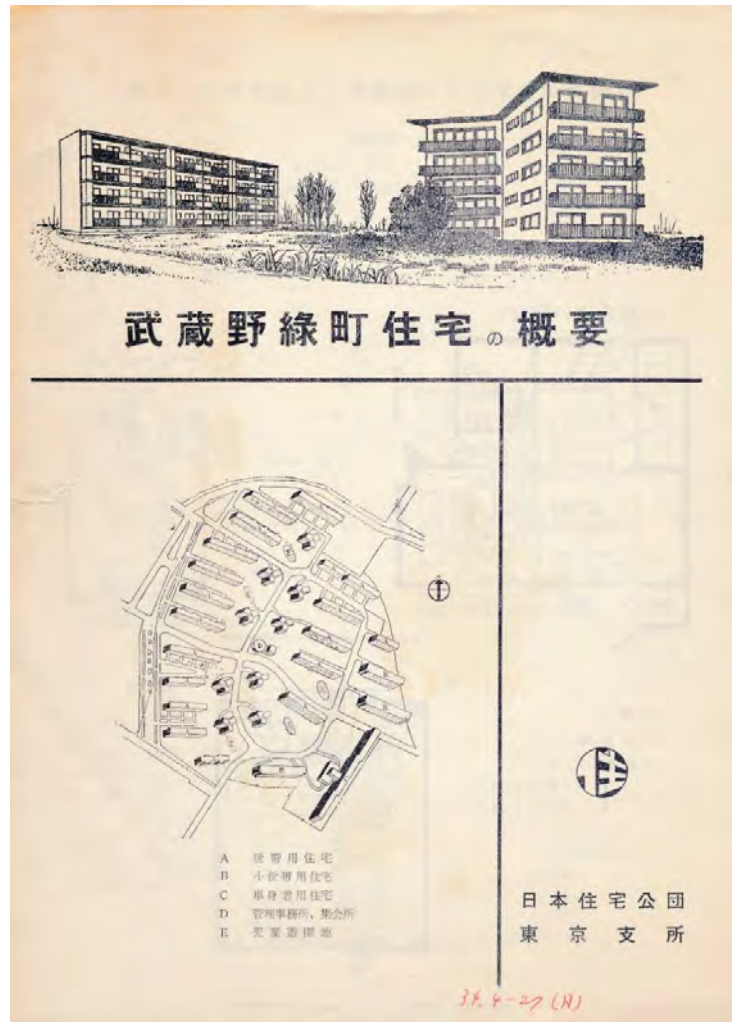
戦時中に陸軍監督工場となった大日本時計田無工場では、飯能国民職業指導所が女子工員と男女事務見習の募集をした。採用は毎月行われていたらしく、募集人員は〇〇〇人と表記されている。

■ チラシ 003-007

武蔵野緑町住宅の概要

日本住宅公団東京支所

サイズ：257×182



武蔵野緑町住宅は敷地24,200坪に1,019戸の賃貸集合住宅が建設されて、1957（昭和32）年に竣工した。裏面には、A型世帯用、B型小世帯用、C型単身者用の3種類の見取図などが描かれている。

目次

ごあいさつ

所蔵資料の紹介

I 組織・沿革

- 1 組織図 13
- 2 年譜 14

II 事業報告

- 1 『多摩のあゆみ』の刊行 17
- 2 「多摩の歴史講座」の開催 21

III 活動報告

- 1 歴史資料室の構成 24
- 2 調査・収集 24
- 3 整理・保存 25
- 4 利用・公開 27
- 5 活動日誌 30

IV 調査研究

論文 多摩地域ゆかりの写真家・伊与田昌男

—たましん地域文化財団所蔵「伊与田昌男コレクション」調査報告 I—

. 山田 兼一郎 37

I 組織・沿革

公益財団法人たましん地域文化財団に設置されている歴史資料室は、多摩中央信用金庫創立40周年記念事業の一環として発足された「多摩文化資料開発プロジェクト」にはじまり、同金庫内の部署として活動した「多摩文化資料室」を経て誕生しました。

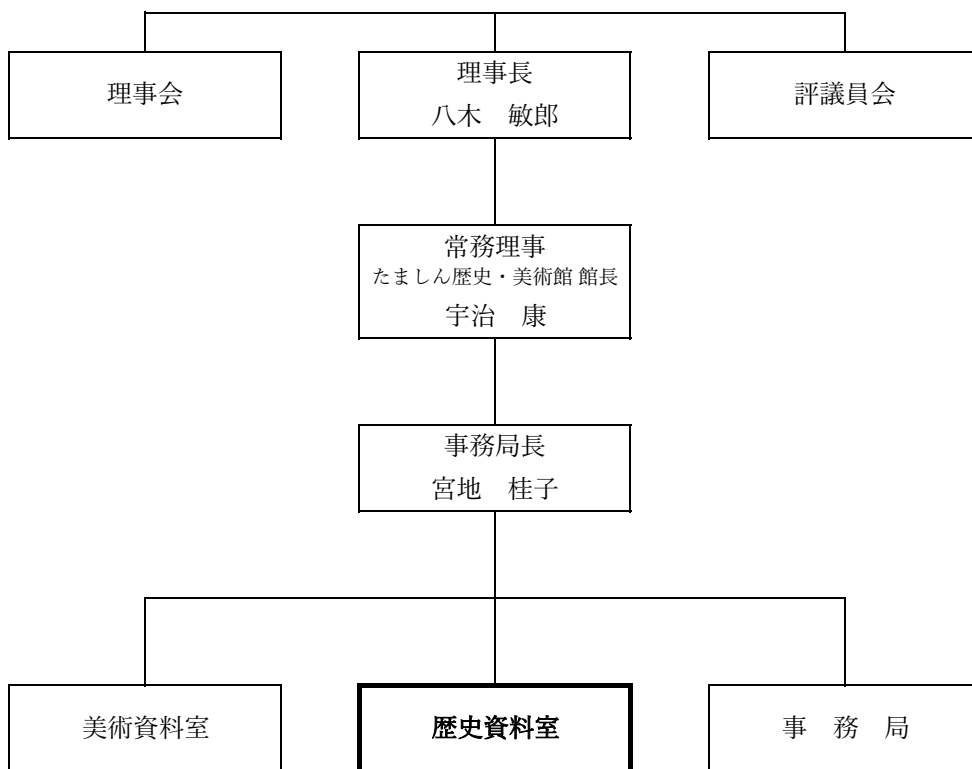
そして、当室は前身となる組織から3つの事業を継承しました。その1つ目は季刊郷土誌『多摩のあゆみ』の企画・編集の役割です。創刊から約半世紀にわたって刊行を続けてきました。

2つ目は「多摩の歴史講座」です。公益財団法人東京市町村自治調査会多摩交流センターとの共催事業として、25年余にわたって開催してきました。

そして3つ目は歴史資料室の運営です。前身の多摩文化資料室以来、多摩地域において文化活動を継続するなかで個人・在野の研究団体・各自治体・大学・研究機関からご寄贈いただいた歴史資料や刊行物（図書・雑誌）を整理保存して、公開してきました。

当室はこれらの活動を継続しながら、現在は多摩地域および周辺地域を対象とする専門図書室として、また多摩各地の地域資料アーカイブズ（主に近現代史資料）として、広く一般市民や在野の郷土史家、研究者の方々にご活用いただいております。

公益財団法人たましん地域文化財団 組織図



公益財団法人たましん地域文化財団

2023年3月31日現在

理事会

理事 八木 敏郎 (理事長)
 理事 川口 哲生
 理事 村野 安成
 理事 和井田 慶子
 理事 馬場 憲一
 理事 中島 孝昌
 理事 宇治 康 (常務理事)
 監事 小澤 伸光
 監事 佐藤 収一

評議員会

評議員 齋藤 慎一
 評議員 歌田 真介
 評議員 岡野 法世
 評議員 坂詰 秀一
 評議員 望月 一雄
 評議員 遠藤 竜太
 評議員 金井 雅彦
 監事 小澤 伸光
 監事 佐藤 収一

昭和48年 1973	4月 ▶ 多摩中央信用金庫創立40周年記念事業の一環として記念誌編集を担当する 総合企画室企画課・総務部総務課・人事部研修課で「創立40周年記念誌編集委員会」を発足
昭和49年 1974	9月1日 ▶ 多摩中央信用金庫創立40周年記念誌『多摩の歩みとともに』を発行
昭和50年 1975	6月2日 ▶ 多摩中央信用金庫創立40周年記念誌の継続事業として専務理事が責任者となり 「多摩文化資料開発プロジェクト」が発足 11月15日 ▶ 『多摩のあゆみ』創刊号の発行（編集・多摩文化資料プロジェクト）
昭和51年 1976	1月 ▶ 多摩中央信用金庫の組織改革に伴い「多摩文化資料開発プロジェクト」が部署に昇格して「多摩文化資料室」を新設（多摩中央信用金庫本店内）
昭和58年 1983	11月15日 ▶ 別冊『多摩のあゆみ 総目次（創刊号-32号）』を発行
昭和60年 1985	11月15日 ▶ 創刊10周年となる『多摩のあゆみ』第41号を発行 別冊『多摩のあゆみ 総目次（創刊号-41号）』を発行
昭和62年 1987	3月16日 ▶ 多摩文化資料室を多摩中央信用金庫本店から国立支店5階に移転
昭和63年 1988	2月15日 ▶ 節目となる『多摩のあゆみ』第50号を発行 5月15日 ▶ 別冊『多摩のあゆみ 50号記念総目次（創刊号-51号）』を発行
平成3年 1991	4月26日 ▶ 財団法人たましん地域文化財団の設立認可 6月 ▶ 財団内に「歴史資料室」を開設（国立支店5階） 多摩文化資料室の業務（歴史部門）を継承
平成7年 1995	11月15日 ▶ 創刊20周年となる『多摩のあゆみ』第81号を発行 別冊『多摩のあゆみ 総目次（創刊号-80号）』を発行
平成9年 1997	6月 ▶ 東京市町村自治調査会多摩交流センターとの共催事業 「多摩の歴史講座」を開講
平成10年 1998	6月 ▶ 『多摩のあゆみ』の活動が、社団法人全国信用金庫協会 「第一回信用金庫社会貢献賞 face to face賞」受賞 12月4日 ▶ たましん地域文化財団がメセナ大賞'98「メセナ地域賞」を受賞 （社団法人企業メセナ協議会主催）
平成12年 2000	11月15日 ▶ 節目となる『多摩のあゆみ』第100号を発行
平成13年 2001	5月15日 ▶ たましん地域文化財団のホームページを開設 『多摩のあゆみ』総目次や新着図書・雑誌などの情報公開
平成16年 2004	7月 ▶ たましん地域文化財団ホームページに歴史資料室所蔵資料の検索システムを公開
平成17年 2005	11月15日 ▶ 創刊30周年となる『多摩のあゆみ』第120号を発行
平成18年 2006	9月20日 ▶ 「多摩の歴史講座」開講10年目を迎える （東京市町村自治調査会多摩交流センター共催事業）
平成24年 2012	4月 ▶ たましん地域文化財団が財団法人から公益財団法人へ移行

平成27年 2015	11月15日 ▶ 創刊40周年となる『多摩のあゆみ』第160号を発行
平成28年 2016	9月23日 ▶ 「多摩の歴史講座」開講20年目を迎える (東京市町村自治調査会多摩交流センター共催事業)
平成29年 2017	9月 ▶ たましん地域文化財団ホームページにデジタルアーカイブを開設 『多摩のあゆみ』創刊号～第100号を公開
平成30年 2018	11月 ▶ デジタルアーカイブを追加更新 当室所蔵「絵図・地図」「チラシ」を公開
令和2年 2020	2月 ▶ デジタルアーカイブを追加更新 『多摩のあゆみ』第101号～第120号を公開
	5月15日 ▶ 新型コロナウイルスの影響を受けて『多摩のあゆみ』第178号の発行延期
	6月30日 ▶ 延期していた『多摩のあゆみ』第178号の発行 これに伴い、次号より従来の2月・5月・8月・11月の15日発行を末日発行に変更 デジタルアーカイブを追加更新
令和4年 2022	11月 ▶ 当室所蔵「絵図・地図」「チラシ」「絵葉書」および『多摩のあゆみ』連載中の「赤色 「赤色立体地図」を公開
	3月1日 ▶ 新型コロナウイルス対応としてオンラインによる「多摩の歴史講座」を配信 (～8/31まで) (東京市町村自治調査会多摩交流センター共催事業) ※新型コロナウイルスにより2020年は中止
令和5年 2023	10月19日 ▶ 来場型対面形式の「多摩の歴史講座」を再開 (東京市町村自治調査会共催事業)
	2月1日 ▶ たましん地域文化財団ホームページに『多摩のあゆみ』連載中の「多摩の金融史」 の各論考(PDFデータ)を公開
	3月1日 ▶ 「多摩の歴史講座ONLINE2022」を配信(～8/31まで) (東京市町村自治調査会共催事業)

Ⅱ 事業報告

1 『多摩のあゆみ』の刊行

『多摩のあゆみ』は、当財団の設立母体である多摩中央信用金庫（現・多摩信用金庫）が店頭で無償配布する「茶の間の郷土誌」として、1975（昭和50）年11月に創刊されました。以来、年4回発行の季刊誌として、東京都の西部に位置する多摩地域の歴史・民俗・地理・自然などをテーマに、論考や情報などを掲載しています。

2 「多摩の歴史講座」の開催

「多摩の歴史講座」は、公益財団法人東京市町村自治調査会多摩交流センターと歴史資料室が1997（平成9）年度より企画・共催している連続講座です。本講座は多摩地域の歴史を知る手がかりとなるようなテーマを選択して、最新の研究成果を市民の方々にわかりやすくお伝えすることを目的として開催しています。

※（公財）東京市町村自治調査会多摩交流センターのホームページから2冊の記録集が閲覧、ダウンロードできます。

『地域の歴史を学ぶ－「多摩の歴史講座」10年の記録－』



『地域の歴史を学ぶ2－「多摩の歴史講座」第11回から第20回の記録－』



第186号

特集
疫病退散

2022（令和4）年5月31日発行（発行部数：11,000部） ※前号より2,000部減



高杉 學
「画室のY嬢」

特集 疫病退散

江戸時代後期の立川周辺の疫病と医療 —鈴木平九郎「公私日記」を中心に—	長田直子
疫病（流行病）退散 —日野市域における文久二年の麻疹・コレラ大流行—	矢口祥有里
八王子周辺村落の日記に見る疫病	加藤典子
文久二年の記録に見る麻疹とコレラと侠客	原祥
ムサビの民俗資料からみる、かつての疫病	松本美虹

洋風建築への誘い 第七十五回

国分寺 そのころ（後編）	伊藤龍也
--------------	------

建物雑想記 No.70

養蚕六間型民家「のらや」国分寺店	酒井哲
------------------	-----

多摩の金融史 20

戦前多摩の資産家と金融機関 —資産家名簿にみるその変遷—	早川大介
---------------------------------	------

多摩の歴史を立体視！—赤色立体地図の風景— 13

中央線一直線と赤色立体地図	小野田滋
---------------	------

本の紹介

東京都江戸東京博物館編『東京に生きた縄文人』	宗像義輝
武蔵村山市立歴史民俗資料館編 『武蔵村山と鉄道—明治から令和まで—』	北村拓
調布飛行場の掩体壕を保存する会編 『つばさに託して～武蔵野の森公園の戦争遺跡が語り 継ぐこと～』	英太郎

企画・編集担当

保坂一房（歴史資料室／室長）

協力者・協力機関

立川市歴史民俗資料館、日野市郷土資料館、八王子市郷土資料館、都立中央図書館
東京室、東京都公文書館、山梨県立図書館、武蔵野美術大学美術資料図書館、東京
都埋蔵文化財センター、鉄道博物館、千葉達朗

配布先

一般定期（553件）	581冊	
贈呈（407件）	1,542冊	
執筆者（12件）	425冊	
協力者・機関等（11件）	314冊	合計 1,060件
たましん支店等（77件）	5,850冊	8,712冊

2022（令和4）年8月31日発行（発行部数：11,000部）

特集
武蔵、相模の人形芝居



田中 允
「九月の詩」

特集 武蔵、相模の人形芝居

首にみる武蔵、相模の人形の共通性、関わり合い	大谷津早苗
東京における初代西川古柳の寄席興行について	細田明宏
多摩地域に広まった車人形—ろくろ車を中心に—	服部真理
【インタビュー】	編集部
江戸糸あやつり人形 結城座 三代目両川船遊師に聞く	栃原嗣雄
秩父の人形芝居	
薩摩千代太夫（落合濱次郎）の説経節台本について	
～飯能市指定有形民俗文化財「落合家人形芝居及び説経節関連資料」～	小峰孝男
相模人形芝居下中座の歴史と今	林美禰子

洋風建築への誘い 第七十六回

玉川上水の流れ・橋・建物 その1	伊藤龍也
------------------	------

建物雑想記 No.71

中本達也・白井都記念 芸術資源館	酒井哲
------------------	-----

古文書は語る〈その六二〉

鷹場内農民の生活規制と負担	馬場憲一
—高橋家文書「諸御用向控帳」より—	

多摩の金融史 21

戦前多摩地域の郵便貯金	田中光
-------------	-----

多摩の歴史を立体視！—赤色立体地図の風景— 14

湯殿川流域の湧水分布と中世武士文化（その1）	鈴木泰
------------------------	-----

本の紹介

東久留米市教育委員会編 『東久留米の学校史～明治・大正・昭和・平成～』	牛田守彦
小島日記研究会編 『博愛堂史話 幕末名主日記に見る江戸近郊の世相』	清水隆
八王子・日野カワセミ会編 『見る！聞く！歩く！ 高尾・浅川野鳥図鑑』	小林健人

企画・編集担当

坂田宏之（歴史資料室／係長）

協力者・協力機関

日野団塊世代広場、さいたま民俗文化研究所、三芳町立歴史民俗資料館、八王子市郷土資料館、（公財）現代人形劇センター、読売新聞社記事利用担当、朝日新聞社ライツ事業部、飯能市立博物館、国立公文書館、東久留米市教育委員会生涯学習課文化財係、小島資料館、八王子・日野カワセミ会、佐藤広、河村良知、千葉達朗

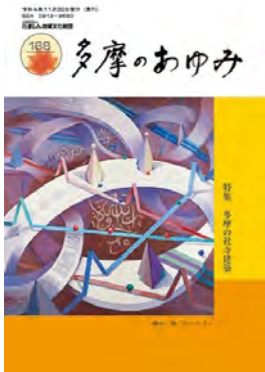
配布先

一般定期（534件）	561冊	
贈呈（403件）	1,537冊	
執筆者（17件）	435冊	
協力者・機関等（22件）	204冊	合計 1,053件
たましん支店等（77件）	5,850冊	8,587冊

第188号

特 集
多摩の社寺建築

2022（令和4）年11月30日発行（発行部数：11,000部）



幡谷 純
「アーヒラ」

特集 多摩の社寺建築		
正福寺地藏堂（東村山市）と周囲の文化財		小川直裕
武蔵国総社 大國魂神社の神社建築について		村上藍
高尾山薬王院飯縄権現堂、知ると世界が広がる		相原悦夫
修復の歴史から見た高幡山金剛寺		秦哲子
武蔵御嶽神社摂社・常磐堅磐社の御殿について		黒田耕
—「江城鎮護」の御嶽蔵王権現社の御本殿—		
大悲願寺の社寺建築		渡邊保弘
洋風建築への誘い 第七十七回		
玉川上水の流れ・橋・建物 その2		伊藤龍也
建物雑想記 No.72		
養蚕民家のアトリエ「旧吉岡家住宅」		酒井哲
古文書は語る〈その六三〉		
塩野適齋と八王子隕石		馬場憲一
—極楽寺所蔵「桑都日記」稿本より—		
多摩の金融史 22		
多摩地域で活動した無尽会社		陳玉雄
多摩の歴史を立体視！—赤色立体地図の風景— 15		
湯殿川流域の湧水分布と中世武士文化（その2）		鈴木泰
本の紹介		
松崎元樹著『東京の古墳を探る』		小畑直輝
樺島榮一郎著『ある土地の物語 中島知久平・ヴォーリズ・レーモンドが見た幻』		松山龍彦

企画・編集担当

保坂一房（歴史資料室／室長）

協力者・協力機関

東村山ふるさと歴史館、府中市ふるさと文化財課、日野市郷土資料館、都立中央図書館、佐藤彦五郎新選組資料館、あきる野市五日市郷土館、立川市産業文化スポーツ部市史編さん室、東大和市立郷土博物館、八王子市郷土資料館、極楽寺、高幡不動尊金剛寺、正福寺、大國魂神社、高尾山薬王院、大悲願寺、石井弘之、千葉達朗

配布先

一般定期（517件）	542冊	
贈 呈（402件）	1,536冊	
執筆者（13件）	260冊	
協力者・機関等（10件）	693冊	合計 1,029件
たましん支店等（77件）	5,850冊	8,881冊

特集
多摩の動物園

2023（令和5）年2月28日発行（発行部数：11,000部）



平丸 陽子
「宝石の種まき」

特集 多摩の動物園

武蔵野の森で、動物に親しみ、木々に触れ、芸術に触れる 一井の頭自然文化園ー 多摩動物公園ができること 動物が生まれ、生き生きと暮らす動物園に向かって ーヒノトントンZOOのあゆみと仕事ー 町田リス園の誕生とあゆみ ー全ての生命の垣根のない動物園をー 動物たちの第二の生涯	金子美香子 香坂美和・清水勲・高柳真世 ヒノトントンZOO （羽村市動物公園） 福田啓一 郡司芽久
--	--

洋風建築への誘い 第七十八回

玉川上水の流れ・橋・建物 その3	伊藤龍也
------------------	------

建物雑想記 No.73

実は快適、初期分譲マンション	酒井哲
----------------	-----

古文書は語る〈その六四〉

八王子千人同心塩野適斎の葬送 ー古谷家文書「勇荘院殿葬送式記録」よりー	馬場憲一
--	------

多摩の金融史 23

多摩地域の証券店舗網	佐藤健太郎
------------	-------

多摩の歴史を立体視！一赤色立体地図の風景ー 16

赤色立体地図による檜原風穴 ー都内唯一の蚕種貯蔵風穴の立地とその現況についてー	清水長正
--	------

本の紹介

武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館編 『武蔵野地域探究～歴史と環境から考える未来～』 滑川邦夫著	内川隆志
『古文書が語る 田無村 村人の喜怒哀楽』	松尾政司

企画・編集担当

坂田宏之（歴史資料室／係長）

協力者・協力機関

高尾山薬王院、八王子市郷土資料館、極楽寺、東京神学大学総務課、多摩交流センター、佐藤広 相原悦夫、石田戡、古谷悦子、千葉達朗、滑川邦夫、木村遊、青海伸一、柿田芳久、蛭田廣一、松山龍彦、橋場万里子、浮揚圭子、白川宗昭、伊藤雅彦

配布先

一般定期（521件）	548冊	
贈呈（398件）	1,531冊	
執筆者（13件）	300冊	
協力者・機関等（19件）	226冊	合計 1,028件
たましん支店等（77件）	5,850冊	8,455冊

たましん地域文化財団・東京市町村自治調査会共催

第25回 多摩の歴史講座**デジタルアーカイブで資料をみる—古文書・絵図・地図・写真—**

博物館で展示ケースの資料を眺めるだけの時代から、デジタルアーカイブの普及により家にいながら資料を閲覧できるようになりました。PCやスマホの画面上で自由に拡大縮小して資料の細部まで観察することで、誰にでも資料を深く学ぶ可能性が開かれつつあります。

本講座では、多摩地域の博物館・図書館・大学がデジタルアーカイブで公開している古文書・絵図・地図・写真、そして見どころや使い方について解説いただきます。

◇講師・発表テーマ

□第1講 10月19日（水）午後2時00分～午後3時30分

- 「福生の古地図「下河原図」「字南」を読み解く—福生デジタル—」

講師：青海伸一（福生市郷土資料室）／柿田芳久（元福生市立図書館長）

□第2講 11月2日（水）午後2時00分～午後3時30分

- 「欲しい地域資料にたどり着くには

—小平市立図書館の地域資料とデジタルアーカイブ—

講師：蛭田廣一（元小平市中央図書館長）

□第3講 11月16日（水）午後2時00分～午後3時30分

- 「三鷹市大沢地区の歴史を古写真で考える—ICUアーカイブズデータベース—」

松山龍彦（国際基督教大学ICUアーカイブズ）

□第4講 11月30日（水）午後2時00分～午後3時30分

- 「調布玉川惣画図をめぐる旅—多摩市デジタルアーカイブ—」

講師：橋場万里子（パルテノン多摩）／浮揚圭子（多摩市立図書館）

□第5講 12月14日（水）午後2時00分～午後3時30分

- 「戦国時代の紅林家文書を読む—昭島市デジタルアーカイブズ—」

講師：白川宗昭（昭島市文化財保護審議会）

伊藤雅彦（昭島市アキシマエンス管理課文化財係）



事業報告

- 会場：多摩信用金庫府中支店4階会議室
(京王線府中駅南口2分)
- 定員：45名
(コロナ禍のため例年の約半数にて実施)
- 申込者数：83名(定員を超過したため抽選)
- 参加費：無料
- 企画担当：坂田宏之(歴史資料室/係長)

- 第1講 参加者数：35名
- 第2講 参加者数：32名
- 第3講 参加者数：29名
- 第4講 参加者数：29名
- 第5講 参加者数：28名

多摩の歴史講座 ONLINE2022

2022年10月から12月にかけて開催した、(公財)たましん地域文化財団・(公財)東京市町村自治調査会共催「多摩の歴史講座」(第25回)「デジタルアーカイブで資料をみる—古文書・絵図・地図・写真—」のONLINE配信です。多摩地域の5つのデジタルアーカイブを、実際の画面を検索しながら、古地図や写真、古文書などの資料を解説しています。各動画の最後にアンケートフォームのURL、二次元コードが表示されます。ご協力をお願いいたします。



当室では、新型コロナウイルス感染症の影響を受けて2021度の「多摩の歴史講座」は来場型対面形式の講座からオンライン形式に切り替えて開催しました。オンライン講座ではこれまでの対面講座にはない受講者層の参加があり、各方面からの好評を得ることができました。

そこで、2022年度からは従来の対面講座に加えて、同講座を録画・編集した「多摩の歴史講座ONLINE」の配信を開始しました。対面・オンラインのハイブリット型の講座企画は次年度も継続していく予定です。

■視聴期間

令和5年3月1日(水)～8月31日(木)

■申込方法

視聴を希望される方は、URL・二次元コードの申し込みフォームからお申し込みください。公開webのURL・パスワードをお送りします。



<https://bit.ly/3QYsoSk>

III 活動報告

1. 歴史資料室の構成

(1) 職員 (2022年度)

歴史資料室

室長	保坂 一房
係長	坂田 宏之
室員	山田 兼一郎
	宮崎 紀子 (中途退職)
	岩崎 冴子

(2) 施設の概要

所在地 〒186-8686

東京都国立市中1-9-52 5階

名称 公益財団法人たましん地域文化財団
歴史資料室

構造 鉄筋コンクリート造、地上6階

歴史資料室諸設備 (多摩信用金庫国立支店5階)

開架閲覧室 (延棚346.4㎡)

閉架書庫 (延棚132.8㎡)

事務室 (延棚85.5㎡)

応接室 (延棚67.9㎡)

廊下 (延棚111.9㎡)

(3) 専門職員の社会貢献ならびに教育研究活動

■保坂 一房

【社会貢献活動】

青梅市文化財保護審議会委員

立川市史編さん委員 (近代部会長兼任)

日野市郷土資料館協議会委員

日野市古文書等歴史資料整理編集委員会委員

NPO法人共同保存図書館・多摩 (多摩デポ) 理事

【教育研究活動】

[単著] 『多摩地域の交通網の歴史と変遷 (リカレント教育コンテンツ 多摩百科全書)』 (公益財団法人 学術・文化・産業ネットワーク多摩、2023年、インターネット限定公開)

[単著] 『地域資料とデジタルアーカイブーたましん地域文化財団歴史資料室を例にー』 (NPO法人 共同保存図書館・多摩、2023年)

[共同執筆] 「専門図書館の蔵書の書誌に対するISBN大量遡及入力の実践ーたましん地域文化財団歴史資料室を事例に」 (『現代の図書館』第242号、2022年)

■坂田 宏之

【社会貢献活動】

説経節の会 (会長)

八王子市伝統文化ふれあい事業実行委員

■山田 兼一郎

【教育研究活動】

[執筆] 「地域資料としての包装紙」 (『ミュージアム多摩』No.44、2023年)

[執筆] 「杉並の偉人・内田秀五郎と今村力三郎ー専修大学所蔵資料の整理に携わってー」 (『杉並郷土史会会報』第298号、2023年)

[執筆] 「学芸員としての待遇とキャリア選択」 (『Passo a Passo (専修大学資格課程年報)』No.25、2023年)

2. 調査・収集

(1) 主たる調査 ※外部協力者の敬称略

・森芳雄旧蔵資料に関する調査 (於森敬子氏邸)

日時: 2022年5月24日 (火)

調査者: 保坂一房

・八王子市小比企丘陵の現地調査

日時: 6月14日 (火)

調査者: 鈴木泰 (大久保長安の会)、千葉達朗 (アジア航測株式会社)、坂田宏之、山田兼一郎

・伊与田昌男関連資料調査 (於向南学園)

日時: 7月28日 (木)

調査者: 山田兼一郎

・伊与田昌男関連資料調査 (於八幡八雲神社)

日時: 8月4日 (木)

調査者: 山田兼一郎

・伊与田昌男関連資料調査 (於結核研究所図書室)

日時: 8月8日 (月)

調査者: 山田兼一郎

- ・伊与田昌男関連資料調査（於国立国会図書館）

日 時：8月8日（月）

調査者：山田兼一郎

- ・松井虎二郎旧蔵資料調査（於歴史資料室）

日 時：10月4日（火）

調査者：川崎晶子（中西悟堂協会）、安西英明（日本野鳥の会参与）、山田兼一郎

- ・伊与田昌男関連資料調査（於結核研究所図書室）

日 時：10月24日（月）

調査者：山田兼一郎

- ・中島陟関連資料調査（於宮内庁書陵部図書課宮内公文書館）

日 時：2023年1月10日（火）

調査者：保坂一房

- ・伊与田昌男関連資料調査（於小田原市田島）

日 時：3月8日（水）

調査者：野地芳男、小泉政治、山田兼一郎

- ・松井虎二郎旧蔵資料調査（於歴史資料室）

日 時：3月14日（火）

調査者：川崎晶子（中西悟堂協会）、安西英明（日本野鳥の会参与）、松井家親族、山田兼一郎

（2）主な寄贈資料

- ・佐藤多持家旧蔵資料（写真・包装紙・絵葉書・ポスターなど）
- ・各種資料（図書・チラシ・ラベル・新聞記事・鉄道関係資料など）
- ・村野常右衛門関係資料（図書）
- ・学校新聞および聴取無線（ラジオ）関係資料

3. 整理・保存

（1）入手資料の整理

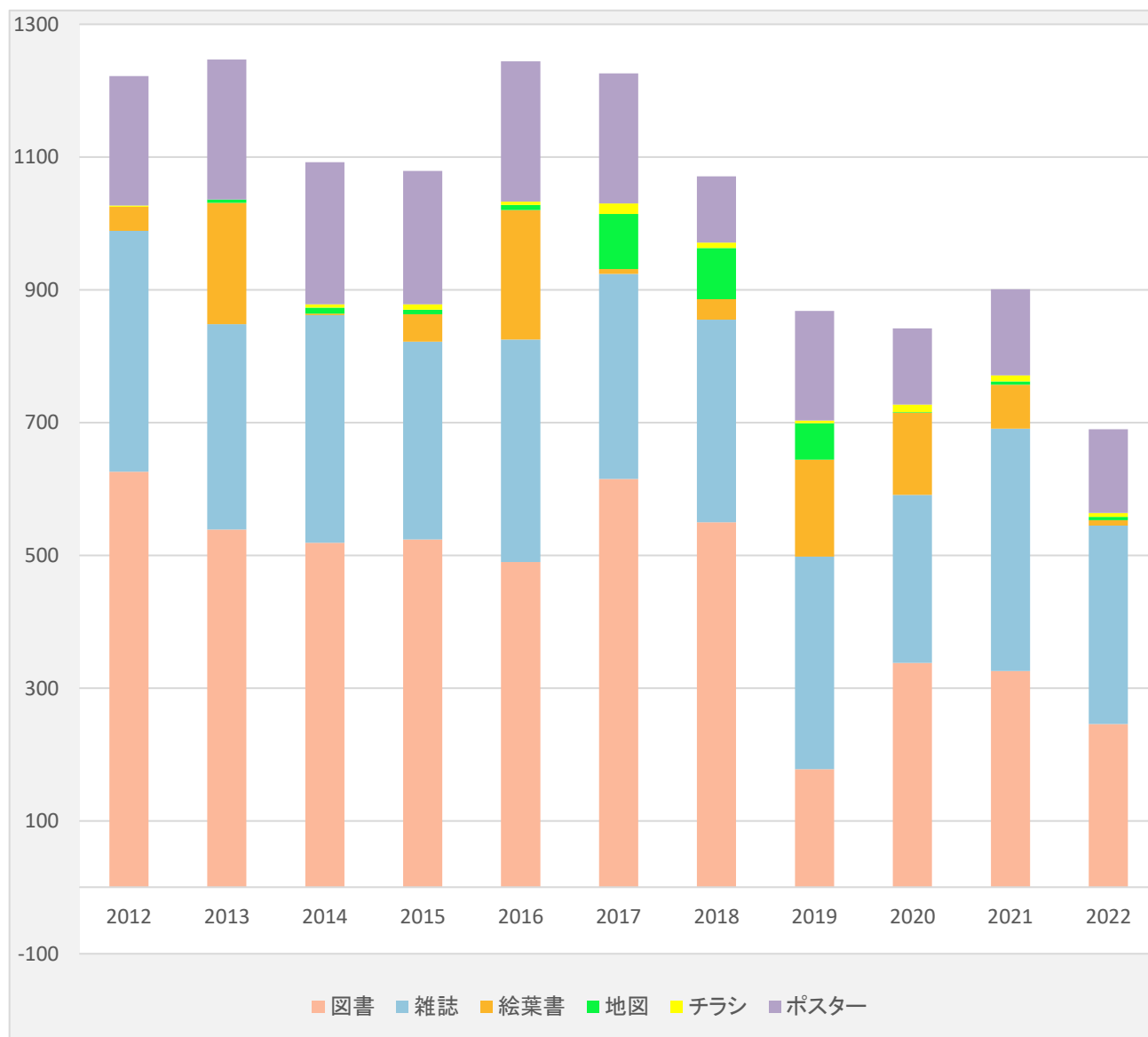
◆月別登録集計表

	図書	雑誌	絵葉書	地図	チラシ	ポスター	計
2021年度総計	27,277	16,049	6,471	1,848	546	4,531	56,722
2022年							
4月	35	20	1		1	9	66
5月	21	24		4		6	55
6月	43	31		1	4	9	88
7月	14	17	5		1	12	49
8月	15	19				3	37
9月	16	23				16	55
10月	23	45				21	89
11月	17	27				11	55
12月	19	15				9	43
2023年							
1月	8	35	2			7	52
2月	11	12				13	36
3月	24	31				10	65
2022年度計	246	299	8	5	6	126	690
総計	27,523	16,348	6,479	1,853	552	4,657	57,412

活動報告

◆過去10年間の入手資料数の変動

年度	図書	雑誌	絵葉書	地図	チラシ	ポスター	合計
2012	626	363	36	0	2	195	1,222
2013	539	309	183	5	0	211	1,247
2014	519	343	2	9	5	214	1,092
2015	524	298	41	7	8	201	1,079
2016	490	335	195	8	5	211	1,244
2017	615	309	7	83	16	196	1,226
2018	550	305	31	77	8	100	1,071
2019	178	320	146	55	4	165	868
2020	338	253	124	1	11	115	842
2021	326	365	66	5	9	130	901
2022	246	299	8	5	6	126	690



※ 図書は会報等の資料数も含む

※ 雑誌タイトル数…655件（タイトルや発行所の変更後も、巻号が続いているものは同一タイトルとした）

◆その他の入手資料

資料群	内 容	点 数
包装紙	多摩地域を中心に全国各地の商店の包装紙、主に寄贈資料に含まれていた包装紙または日常の購入品・贈答品から収集した包み紙・紙袋など	211
ラベル	収集または寄贈された酒類・タバコ・マッチのラベルなど	138
新聞資料	収集または寄贈された新聞資料（切抜や部分を含む）	7
鉄道関係資料	収集または寄贈された鉄道関係資料（記念乗車券・時刻表など）	56

(2) 地域資料のデジタル化について

当室では、デジタルアーカイブで所蔵資料を公開している。公開中の資料以外にも劣化状態の著しい資料や他機関に所蔵のない稀覯本や貴重資料、デジタルアーカイブ新規搭載に向けた「チラシ」「絵図・地図」「絵葉書」などのデジタル化作業を日々進めている。また、1990（平成2）年から現在までの新聞紙面（全国紙・ローカル紙）から多摩地域の歴史・文化に関する記事を収集、各記事はスキャン（OCR処理済PDF）の上、デジタルデータとして保管している。

資料群	点 数
絵葉書	8
チラシ	6
マッチラベル	275
ラベル（酒類・タバコなど）	99
新聞（記事切抜含む）	956

4. 利用・公開

(1) ホームページの更新

- ・「多摩の歴史講座」配信の延長（2022年5月24日）
- ・『多摩のあゆみ』第186号を発行しました（5月31日）
- ・デジタルアーカイブのシステムが更新されました（8月19日）
- ・『多摩のあゆみ』第187号を発行しました（8月31日）
- ・多摩の歴史講座、募集開始のご案内（8月31日）
- ・『多摩のあゆみ』第188号を発行しました（11月30日）
- ・新設ページ「多摩の金融史」（2023年2月1日）
- ・『多摩のあゆみ』第189号を発行しました（2月28日）
- ・多摩の歴史講座ONLINE、視聴申し込みのご案内（2月28日）

(2) 収蔵資料の検索システム

当室は収蔵資料の利用・公開サービスを強化するた

め、2004（平成16）年7月から資料検索システムの運用を開始している。

当システムでは、収蔵資料を「図書」「雑誌」「地図」「絵葉書」「チラシ」という5種類の資料群に分けて、各資料群の特徴に合わせた検索項目を個別に設定した。とくに多摩地域を取り上げた論文の著者名・論題の検索機能が一つの特徴となっている。この機能は多摩地域を対象にした歴史系雑誌（市民研究団体の刊行物も含む）や多摩各地の地域博物館が刊行する年報・研究紀要に掲載された論考を対象とした。

(3) デジタルアーカイブの運用

当室では、上記の資料検索システムと併せて2017（平成29）年9月からデジタルアーカイブの運用を開始した。このシステムでは、「絵図・地図」「チラシ」「絵葉書」などの所蔵資料3,150点余、『多摩のあゆみ』バックナンバー（創刊号～第120号）や『多摩のあゆみ』連載で取り上げた「赤色立体地図」を公開している。

活動報告

当システムには、キーワード検索の機能があり、公開中の『多摩のあゆみ』（創刊号～第120号）は本文テキストの全文検索が可能である。また、「絵図・地図」「チラシ」は画面上で自由に拡大縮小が可能であり細部まで閲覧することができる。さらに、その一部は現在の地図（国土地理院）と重ねて透過することで、古地図と現在地の比較を容易にする機能を搭載した。

また、「絵葉書」に関しては、明治から昭和前期にかけて作成されたもの、絵柄は多摩地域を中心に東京都23区や全国各地、国外にまで及び、マップやサムネイル一覧、データ、リストから検索・閲覧することができる。

（4）収蔵資料の利用公開

- ◆申請者：清瀬市史編さん室
内容：清瀬市郷土博物館企画展「結核療養と清瀬」にて展示
(2022年2月1日～4月30日)
貸出資料：石田波郷肖像（昭和25年、東京療養所にて）伊与田昌男撮影
- ◆申請者：杉並区立郷土博物館
内容：杉並区立郷土博物館企画展「高円寺・阿佐ヶ谷・西荻窪駅開業100周年記念企画展 すぎなみ鉄道出発進行！」にて展示
(2022年7月16日～9月4日)
貸出資料：甲武鉄道もより名所案内
- ◆申請者：東京工業大学（学部生）
内容：卒業論文に掲載予定
貸出資料：チラシ 八王子案内
地図 高尾景園地・津久井溪谷
甲武相国境・ハイキング地図
チラシ 新東京近郊回遊一覧絵図
- ◆申請者：府中市史編さん室
内容：『府中市史 自然編』に掲載予定
貸出資料：絵 図 武蔵野国北多摩郡府中町官幣小社大國魂神社之図
絵葉書 官幣小社大國魂神社馬場
絵葉書 武蔵野国府中大國魂神社随神門
ならび日露戦役記念碑
絵葉書 武蔵府中町御滝神社の森

- ◆申請者：清瀬市史編さん室
内容：『市史研究 きよせ』第8号に掲載
(2023年3月発行)
貸出資料：写真 桜株の石碑（昭和20年代末頃）
伊与田昌男撮影
- ◆申請者：多磨霊園
内容：多磨霊園100周年記念写真パネル展「多磨霊園今昔展」にて展示（2023年4月1日～2024年3月31日）
貸出資料：絵葉書（多磨墓地）墓地内連絡路
絵葉書（多磨墓地）多磨墓地管理事務所
絵葉書（多磨墓地）正門
絵葉書（多磨墓地）北門
絵葉書（多磨墓地）納骨堂
絵葉書（多磨墓地）北門噴水塔
絵葉書（多磨墓地）東郷元帥御墓所
絵葉書（多磨墓地）東郷元帥墓所
及び噴水塔
絵葉書 仁翁閣（多磨墓地休憩所）
チラシ 東京市多磨墓地案内
チラシ 多磨霊園御案内

（5）刊行物の二次利用

- ◆申請者：全国公衆浴場生活衛生協同組合連合会
内容：連合会業界紙『全国浴場新聞』第633号～第640号への転載（2022年4月～11月）
利用刊行物：『多摩のあゆみ』第183号「特集」所収（佐伯雅斗氏・小嶋宏和氏・島田敏生氏論考）
- ◆申請者：戎光祥出版株式会社
内容：新井浩文編著『旧国中世重要論文集成 武蔵国』への転載（2023年3月発行）
利用刊行物：『多摩のあゆみ』第143号「特集」所収（鎌倉佐保氏論考）
- ◆申請者：六一書房
内容：村田文夫『考古学による歴史的背景の追求』への転載（2023年3月発行）
利用刊行物：『多摩のあゆみ』第152号「特集」所収（村田文夫氏論考）

- ◆申請者：技術評論社
内容：陣内秀信・松田法子・齋藤彰英『東京水辺散歩』への転載（2022年10月発行）
利用刊行物：『多摩のあゆみ』第179号「連載」所収（野口淳氏論考）

- ◆申請者：鈴木浩三氏
内容：鈴木浩三『地形で見る江戸・東京発展史（ちくま新書1693）』への転載（2022年11月発行）
利用刊行物：『多摩のあゆみ』第174号「連載」所収（千葉達朗氏論考）

（6）教育普及活動

- ◆団体見学の受け入れ
団体名：成城大学（外池昇ゼミナール・17名）
日時：2022年9月8日（木）

- 団体名：くにたち図書館協議会（15名）
日時：2023年3月16日（木）

- ◆職場体験学習の受け入れ
多摩地域の中学校から職場体験学習についての依頼を受けて、体験学習の指導を実施した。当室の業務の一環である資料の「収集・整理」「利用・公開」の体験を通して、地域資料を収集・保管することの重要性を意識しながら各課題に取り組んでもらった。

- 学校名：稲城市立稲城第五中学校（3名）
日時：2022年9月13日（火）～15日（木）

- 学校名：国立市立国立第一中学校（4名）
日時：2022年9月28日（水）



成城大学生への講義



くにたち図書館協議会員を閉架書庫にご案内



稲城第五中学校生徒が歴史資料室の仕事を体験

5. 活動日誌（2022年度）

【4月】

- 5日 NPO法人共同保存図書館・多摩（多摩デポ）
副理事長・清田義昭氏、理事・田中ヒロ氏が歴史資料室を見学（保坂一房）
- 7日 月例打合せ（事務局・歴史資料室）
- 7日 立川市柴崎福祉会館にて立川市シルバー大学の講義（保坂一房）
- 8日 飯能市立博物館にて同館学芸員・引間隆文氏と『多摩のあゆみ』第187号（特集）に係る打合せ（坂田宏之）
- 12日 NPO法人共同保存図書館・多摩（多摩デポ）
理事会に参加（保坂一房）
- 14日 杉並区立郷土博物館学芸員・馬場悦子氏より所蔵資料に係る問合せ
- 14日 多摩信用金庫立川本店にて多摩の金庫史に係る展示の打合せ（宇治康、保坂一房）
- 15日 羽村市郷土博物館にて三多摩公立博物館協議会発行『ミュージアム多摩』の発送作業（坂田宏之）
- 19日 NPO法人共同保存図書館・多摩（多摩デポ）
理事会に参加（保坂一房）
- 19日 鈴木泰氏と『多摩のあゆみ』第187号連載「多摩の歴史を立体視」に係る打合せ（坂田宏之）
- 22日 江戸糸あやつり人形 結城座稽古場（小金井市）にて両川船遊氏・結城孫三郎氏への『多摩のあゆみ』第187号（特集）に係る取材（坂田宏之）
- 24日 立川市史近代部会リモート会議に参加（保坂一房）
- 26日 『地方史文献年鑑（2021年版）』の調査結果を送付（岩崎冴子）
- 29日 NPO法人共同保存図書館・多摩（多摩デポ）
・カーリル研究会に参加（保坂一房）

【5月】

- 12日 月例打合せ（事務局・歴史資料室）
- 12日 立川市柴崎福祉会館にて立川市シルバー大学の講義（保坂一房）
- 13日 杉並区立郷土博物館学芸員・馬場悦子氏より資料借用に係る問合せ
- 14日 中島久榮氏（中島渉氏令室）と佐藤収一氏（株式会社サトウ会長・明窓浄机館長）、渡辺

彰子氏と面談（保坂一房）

- 19日 TRC-ADEAC（オンライン）説明会に参加（保坂一房）
- 24日 多摩信用金庫恩方支店へ『多摩のあゆみ』在庫運搬（坂田宏之、山田兼一郎）
- 24日 森敬子氏宅にて森芳雄旧蔵資料の閲覧・調査（保坂一房）
- 30日 多摩信用金庫各支店に『多摩のあゆみ』第186号の納品
- 30日 『多摩のあゆみ』連載に係る八王子市小比企丘陵現地調査の打合せ（坂田宏之、山田兼一郎）
- 31日 『多摩のあゆみ』第186号の配布（多摩信用金庫本店、立川市立中央図書館、立川市歴史民俗資料館ほか）
- 31日 NPO法人共同保存図書館・多摩（多摩デポ）
・カーリル研究会リモート会議に参加（保坂一房）

【6月】

- 1日 『多摩のあゆみ』第186号の配布（武蔵野美術大学民俗資料室、府中市役所、日野市郷土資料館、八王子市郷土資料館ほか）
- 2日 月例打合せ（事務局・歴史資料室）
- 2日 全国大学史資料協議会東日本部会2022年度総会・大会に参加（於専修大学神田キャンパス）（山田兼一郎）
- 3日 『多摩のあゆみ』第186号の配布（くにたち郷土文化館、くにたち中央図書館、国立市役所ほか）
- 3日 多摩信用金庫本店にて金融史研究会に参加（宇治康、保坂一房）
- 3日 八王子市伝統文化ふれあい事業実行委員会に参加（坂田宏之）
- 6日 相模国霊場研究会に参加（坂田宏之）
- 7日 多摩信用金庫府中支店70周年記念への協力（坂田宏之、宮崎紀子）
- 7日 NPO法人共同保存図書館・多摩（多摩デポ）
理事会に参加（保坂一房）
- 8日 当室にてフォトグラファー・伊藤龍也氏と『多摩のあゆみ』（連載）に係る打合せ（坂田宏之・山田兼一郎）

- 9日 江戸糸あやつり人形 結城座のスタジオ公演を見学（坂田宏之）
- 10日 川野車人形保存会に『多摩のあゆみ』第187号（特集）に係る調査（坂田宏之）
- 11日 杉並区歴史研究団体連絡会・杉並郷土史会共催の歴史講演会に参加（於阿佐谷区民センター）（山田兼一郎）
- 12日 多摩地域史研究会第30回大会「中世武蔵府中とその周辺」に参加（於たましんRISURUホール）（保坂一房、山田兼一郎）
- 14日 『多摩のあゆみ』連載に係る八王子市小比企丘陵の現地調査（坂田宏之、山田兼一郎）
- 15日 『多摩のあゆみ』第186号（連載）の協力者・協力機関である株式会社のらや、田村半十郎氏へ本誌寄贈
- 16日 日野市古文書等歴史資料整理編集委員会に参加（保坂一房）
- 16日 当室にてフォトグラファー・伊藤龍也氏と『多摩のあゆみ』（連載）に係る打合せ（坂田宏之・山田兼一郎）
- 17日 三多摩公立博物館協議会総会に参加（坂田宏之）
- 22日 朝日新聞社社史編修センターに伊与田昌男関連情報の照会（山田兼一郎）
- 24日 NPO法人共同保存図書館・多摩（多摩デポ）理事会に参加（保坂一房）
- 24日 白井哲哉筑波大学教授が立川市史に関する相談のため来室（保坂一房）
- 24日 日本写真家協会に伊与田昌男関連情報の照会（山田兼一郎）
- 24日 NPO法人共同保存図書館・多摩（多摩デポ）理事会リモート会議に参加（保坂一房）
- 26日 当室所蔵資料の借用につき杉並区立郷土博物館学芸員・馬場悦子氏、金子さおり氏の来室（山田兼一郎）
- 26日 青梅市郷土博物館にて青梅鉄道資料研究会に参加（保坂一房）
- 28日 パルテノン多摩にて多摩市立図書館・浮揚圭子氏、パルテノン多摩学芸員・橋場万里子氏と第25回「多摩の歴史講座」に係る打合せ（坂田宏之、山田兼一郎）
- 30日 武蔵野プレイスにて元小平市立図書館・蛭田廣一氏と第25回「多摩の歴史講座」に係る打合せ（坂田宏之、山田兼一郎）

【7月】

- 1日 旧ヤマジユウ田村家住宅にて福生市郷土資料室学芸員・青海伸一氏と第25回「多摩の歴史講座」に係る打合せ（坂田宏之、山田兼一郎）
- 1日 NPO法人共同保存図書館・多摩（多摩デポ）カーリル研究会リモート会議に参加（保坂一房）
- 5日 城所辰男氏（多摩信用金庫元職員）宅にてお預かり資料の返却（保坂一房）
- 7日 月例打合せ（事務局・歴史資料室）
- 11日 国登録有形文化財（建造物）沖本家住宅洋館・和館の見学（保坂一房、坂田宏之、山田兼一郎、岩崎冴子）
- 12日 『多摩のあゆみ』校正につき馬場憲一法政大学名誉教授が来室（保坂一房）
- 12日 中島勝刊行物の編集につき立川印刷・鈴木武氏が来室（保坂一房）
- 15日 国際基督教大学にてICUアーカイブズ・松山龍彦氏と第25回「多摩の歴史講座」に係る打合せ（山田兼一郎）
- 22日 青梅市文化財保護審議会に参加（保坂一房）
- 26日 昭島市アキシマエンシスにて伊藤雅彦氏と第25回「多摩の歴史講座」に係る打合せ（坂田宏之）
- 28日 学校法人向南学園にて伊与田昌男関連資料調査（山田兼一郎）

【8月】

- 2日 日野市郷土資料館協議会に参加（保坂一房）
- 3日 月例打合せ（事務局・歴史資料室）
- 4日 多摩信用金庫恩方支店より当室刊行物の在庫運搬作業（山田兼一郎）
- 4日 八王子市横山町の八幡八雲神社にて伊与田昌男関連資料調査（山田兼一郎）
- 8日 結核研究所図書室および国立国会図書館にて伊与田昌男関連資料調査（山田兼一郎）
- 9日 アマチュア写真家・中嶋康夫氏との面会および写真集『昭和50年 青梅商店街（I・II）』の購入（保坂一房・山田兼一郎）
- 9日 NPO法人共同保存図書館・多摩（多摩デポ）理事会リモート会議に参加（保坂一房）
- 10日 株式会社TTトレーディングより資料保存容器に関する情報収集（保坂一房・山田兼一郎）

活動報告

- 12日 当室にてフォトグラファー・伊藤龍也氏と『多摩のあゆみ』（連載）に係る打合せ（坂田宏之・山田兼一郎）
- 12日 NPO法人共同保存図書館・多摩（多摩デポ）カーリル研究会リモート会議に参加
- 16日 立川市史編集委員会のリモート会議に参加（保坂一房）
- 21日 株式会社TKB/PGIから資料保存容器に関する情報収集（山田兼一郎）
- 23日 多摩動物公園にて教育普及係係長香坂美和氏と『多摩のあゆみ』第189号（特集）に係る打合せ（坂田宏之）
- 25日 株式会社資料保存器材より資料保存容器に関する情報収集（保坂一房・山田兼一郎）
- 26日 中西悟堂協会・川崎晶子氏より東村山の自然を愛し守る会（発起人）・松井虎二郎旧蔵資料の寄贈受入先に係る問合せ（山田兼一郎）
- 27日 当室所蔵資料を貸出中の杉並区立郷土博物館企画展「すぎなみ鉄道出発進行!!」の見学（山田兼一郎）
- 28日 観光考古学会より同会主催パネルディスカッションへの後援依頼（山田兼一郎）
- 30日 多摩信用金庫各支店に『多摩のあゆみ』第187号の納品
- 31日 『多摩のあゆみ』第187号の配布（多摩信用金庫本店、立川市立中央図書館、立川市歴史民俗資料館ほか）
- 真研究所に伊与田昌男関連情報の照会（山田兼一郎）
- 10日 八王子車人形・国重要無形民俗文化財指定記念祝賀会に参加（坂田宏之）
- 15日 稲城第五中学校3名の職場体験学習（保坂一房、坂田宏之、山田兼一郎、岩崎冴子）
- 16日 保健同人社に伊与田昌男関連情報の照会（山田兼一郎）
- 18日 当室所蔵資料の返却につき杉並区立郷土博物館学芸員・馬場悦子氏、金子さおり氏の来室（保坂一房）
- 18日 多摩文化フェスティバル2022「伝承のたまてばこ」にて八王子車人形・説経節の会の公演に出演（坂田宏之）
- 19日 立川市史近代部会リモート会議に参加（保坂一房）
- 21日 当室にてフォトグラファー・伊藤龍也氏と『多摩のあゆみ』（連載）に係る打合せ（坂田宏之）
- 23日 町田リス園にて副園長・福田啓一氏と『多摩のあゆみ』第189号（特集）に係る打合せ（坂田宏之）
- 24日 青梅鉄道研究会に参加（保坂一房）
- 28日 国立第一中学校4名の職場体験学習（保坂一房、坂田宏之、山田兼一郎、岩崎冴子）
- 30日 東京市町村自治調査会・松尾尚之氏他2名が来室、多摩東京移管130周年記念事業に係る打合せ（保坂一房）
- 30日 井の頭自然文化園にて園長・金子美香子氏と『多摩のあゆみ』第189号（特集）に係る打合せ（坂田宏之）

【9月】

- 1日 月例打合せ（事務局・歴史資料室）
- 2日 アルピン株式会社と当財団ホームページに係る打合せ（保坂一房、宮地桂子）
- 2日 多摩信用金庫本店にて金融史研究会に参加（保坂一房、植木郁夫）
- 2日 『多摩のあゆみ』第187号の配布（くにたち郷土文化館、昭島市立図書館、八王子車人形西川古柳座、八王子市郷土資料館ほか）
- 7日 『多摩のあゆみ』第187号（連載）の協力機関・中本達也・白井都記念 芸術資源館に本誌寄贈および現地見学（保坂一房・山田兼一郎）
- 8日 外池昇成城大学教授ゼミナール17名が歴史資料室の見学および講義（保坂一房）
- 9日 酒田市立土門拳記念館および株式会社土門拳写

【10月】

- 4日 当室にて中西悟堂協会・川崎晶子氏、日本野鳥の会参与・安西英明氏と面会および東村山の自然を愛し守る会（発起人）・松井虎二郎旧蔵資料の閲覧（山田兼一郎）
- 5日 ヒノトントンZOO（羽村市動物公園）にて土木課公園管理係係長・井上亮太氏、羽村市動物公園・新島安弘氏と『多摩のあゆみ』第189号（特集）に係る打ち合わせ（坂田宏之）
- 6日 月例打合せ（事務局・歴史資料室）
- 6日 全国大学史資料協議会全国研究会に参加（於神

- 奈川大学みなとみらいキャンパス) (山田兼一郎)
- 7日 相模国霊場研究会にて「小栗判官一代記より照手姫車引きの段(語り・薩摩花太夫/三味線・京屋巧/解説・坂田宏之)の実演(於ユニコムプラザさがみはら)(坂田宏之)
- 11日 株式会社トーリ・ハンよりドライキャビネットに関する情報収集(保坂一房・山田兼一郎)
- 11日 NPO法人共同保存図書館・多摩(多摩デポ)理事会リモート会議に参加(保坂一房)
- 12日 第25回「多摩の歴史講座」に係るリハーサル(於多摩信用金庫府中支店)(坂田宏之、山田兼一郎)
- 13日 当室にてフォトグラファー・伊藤龍也氏と『多摩のあゆみ』(連載)に係る打合せ(坂田宏之)
- 19日 第25回「多摩の歴史講座」第1講を開講(宇治康、保坂一房、坂田宏之、山田兼一郎)
- 24日 結核研究所図書室にて伊与田昌男関連資料調査(山田兼一郎)
- 25日 NPO法人共同保存図書館・多摩(多摩デポ)カーリル研究会リモート会議に参加(保坂一房)
- 27日 日野市古文書等歴史資料整理編集委員会に参加(保坂一房)
- 28日 立川市史編さん委員会に参加(保坂一房)
- 30日 当室にてフォトグラファー・伊藤龍也氏と『多摩のあゆみ』(連載)に係る打合せ(坂田宏之)

【11月】

- 1日 青梅市文化財保護審議会に参加(保坂一房)
- 2日 第25回「多摩の歴史講座」第2講を開講(保坂一房、坂田宏之、山田兼一郎)
- 3日 調布市祇園寺にて第11回「祇園精舎の法灯会」に参加(山田兼一郎)
- 10日 月例打合せ(事務局・歴史資料室)
- 13日 「八王子車人形と民俗芸能の公演」に説経節の会として出演(坂田宏之)
- 15日 日野市古文書委員会に参加(保坂一房)
- 15日 町田リス園にて『多摩のあゆみ』189号(特集)に係る打合せ(坂田宏之)
- 16日 第25回「多摩の歴史講座」第3講を開講(保坂

- 一房、坂田宏之、山田兼一郎)
- 18日 多摩信用金庫恩方支店へ『多摩のあゆみ』在庫運搬(坂田宏之、山田兼一郎)
- 18日 武蔵野美術大学民俗資料室学芸員・小川和宏氏と『多摩のあゆみ』第190号(特集)に係る打合せ
- 19日 観光考古学会パネルディスカッション「武蔵国分寺跡の保存と観光活用」(当財団後援)に参加(宇治康、山田兼一郎)
- 20日 八王子市伝統文化ふれあい事業 説経節講座に講師として参加(坂田宏之)
- 20日 河井春夫氏の八王子消防保存会総代就任祝賀会に出席(坂田宏之)
- 22日 国立東京工業高等専門学校にて『多摩のあゆみ』191号(特集)に係る打合せ(坂田宏之)
- 25日 TRC-ADEACのシステム更新に伴うリモート説明会に参加(保坂一房)
- 29日 多摩信用金庫各支店および当室に『多摩のあゆみ』第188号の納品
- 29日 『多摩のあゆみ』第188号の配布(多摩信用金庫本店、立川市立中央図書館、立川市歴史民俗資料館、くにたち郷土文化館、くにたち中央図書館ほか)
- 30日 第25回「多摩の歴史講座」第4講を開講(保坂一房、坂田宏之、山田兼一郎)

【12月】

- 1日 『多摩のあゆみ』第188号の配布(大國魂神社、正福寺、日野市ふるさと文化財課、東村山ふるさと歴史館ほか)
- 2日 多摩信用金庫本店にて金融史研究会に参加(宇治康、保坂一房)
- 6日 西東京市郷土資料室にて『多摩のあゆみ』191号(特集)に係る打合せ(坂田宏之)
- 8日 月例打合せ(事務局・歴史資料室)
- 10日 当室にて立川印刷と中島陟刊行物の打合せ(保坂一房)
- 10日 小石川後樂園にて武蔵野文化協会『武蔵野事典』刊行お礼の会・樋渡達也先生卒寿を祝う会に参加(保坂一房)
- 12日 武蔵国分寺跡資料館にて『多摩のあゆみ』191号(特集)に係る打合せ(坂田宏之)

活動報告

- 13日 当室にてフォトグラファー・伊藤龍也氏と『多摩のあゆみ』（連載）に係る打合せ（坂田宏之）
- 14日 第25回「多摩の歴史講座」第5講を開講（宇治康、保坂一房、坂田宏之、山田兼一郎）
- 15日 多摩信用金庫武蔵野支店にて東京大学准教授・小島庸平氏等と金庫資料調査（保坂一房）
- 16日 当室にて法政大学名誉教授・馬場憲一と『多摩のあゆみ』（連載）に係る打合せ（保坂一房）
- 22日 専修大学大学史資料室にて『多摩のあゆみ』190号（特集）に係る打合せ（山田兼一郎）
- 23日 NPO法人共同保存図書館・多摩（多摩デポ）理事会リモート会議に参加（保坂一房）
- 27日 アルピン株式会社と財団ホームページ（多摩の金融史関係）に係る打合せ（保坂一房、多摩信用金庫職員）
- 27日 当室にてフォトグラファー・伊藤龍也氏と『多摩のあゆみ』（連載）に係る打合せ（坂田宏之）
- 28日 防災ジャーナリスト・渡辺実氏と『多摩のあゆみ』191号（特集）に係る打合せ（山田兼一郎）
- 29日 本日より2023年1月4日まで閉室（年末年始）
- 19日 東京工業大学学部生より卒業論文作成に係る資料画像提供依頼（山田兼一郎）
- 22日 第35回多摩郷土誌フェアに参加（坂田宏之、山田兼一郎）
- 27日 東京農工大学農学部准教授・吉川正人氏より『府中市史 自然編』編纂に係る資料画像提供依頼（山田兼一郎）
- 27日 清瀬市市史編さん室より『市史研究 きよせ』編纂に係る資料画像提供依頼（保坂一房）
- 28日 羽村市産業福祉センターにて東京教育労働者組合連続学習会（演題：関東大震災100年 描かれた朝鮮人虐殺を読み解く／講師：新井勝紘氏）に参加（山田兼一郎）
- 28日 当室にて八王子市文化財保護審議会会長・相原悦夫氏より御高著『八王子の社寺建築』『戦後、日本映画の全盛期と八王子の映画館』を受贈

【2月】

【1月】

- 6日 国分寺市教育委員会・中野純氏が中島陟関係資料の閲覧のため来室（保坂一房）
- 10日 宮内庁書陵部図書課宮内公文書館にて中島陟関係資料の調査・撮影（保坂一房）
- 11日 八王子市伝統文化ふれあい事業（説経節講座）車人形・説経節合せ稽古（坂田宏之）
- 12日 月例打合せ（事務局・歴史資料室）
- 13日 東京メトロポリタンテレビジョン株式会社（TOKYO MX「ぐるり東京江戸散歩」）より資料画像提供依頼（山田兼一郎）
- 14日 八王子市伝統文化ふれあい事業（説経節講座）発表会リハーサルに参加（坂田宏之）
- 15日 八王子市伝統文化ふれあい事業（説経節講座）発表会に参加（坂田宏之）
- 18日 当室にてフォトグラファー・伊藤龍也氏と『多摩のあゆみ』（連載）に係る打合せ（坂田宏之）
- 1日 月例打合せ（事務局・歴史資料室）
- 2日 八王子市伝統文化ふれあい事業実行委員会に参加（坂田宏之）
- 7日 NPO法人共同保存図書館・多摩（多摩デポ）理事会リモート会議に参加（保坂一房）
- 8日 多摩信用金庫価値創造事業部調査役・穴戸亜紀子氏が多摩信用金庫創立90周年に係る調査のため来室（坂田宏之）
- 17日 多摩信用金庫武蔵野支店にて東京大学准教授・小島庸平氏等と金庫資料調査（保坂一房）
- 19日 当室にて立川市文化財保護審議会委員・小坂克信氏と『多摩のあゆみ』（連載）に係る打合せ（坂田宏之）
- 21日 明窓浄机館にて佐藤収一氏・渡辺彰子氏と中島陟刊行物に係る打合せ（保坂一房）
- 22日 当室にて北海道大学名誉教授・越澤明氏と中島陟刊行物に係る打合せ（保坂一房）
- 24日 日野市郷土資料館協議会に参加（保坂一房）
- 24日 NPO法人共同保存図書館・多摩（多摩デポ）カーリル研究会リモート会議に参加（保坂一房）
- 27日 多摩信用金庫各支店に『多摩のあゆみ』第189号の納品
- 28日 『多摩のあゆみ』第189号の配布（多摩信用金

庫本店、立川市立中央図書館、立川市歴史民俗資料館ほか)

【3月】

- 1日 『多摩のあゆみ』第189号の配布（羽村市郷土博物館、羽村動物公園、井の頭自然文化園、武蔵野市ふるさと歴史館、くにたち郷土文化館ほか）
- 1日 当室にて東京市町村自治調査会と多摩東京移管130周年記念誌に係る打合せ（保坂一房）
- 2日 立川市柴崎福祉会館にて立川市シルバー大学の講義（保坂一房）
- 3日 一橋大学学園史資料室にて『多摩のあゆみ』190号（特集）に係る打合せ（山田兼一郎）
- 7日 国立東京工業高等専門学校にて『多摩のあゆみ』191号（特集）に係る打合せ（坂田宏之）
- 8日 神奈川県小田原市田島地区および正恩寺にて伊与田家に関する調査（山田兼一郎）
- 9日 月例打合せ（事務局・歴史資料室）
- 14日 当室にて中西悟堂協会・川崎晶子氏、日本野鳥の会参与・安西英明氏、松井家親族と面会および東村山の自然を愛し守る会（発起人）・松井虎二郎旧蔵資料の閲覧（山田兼一郎）
- 16日 くにたち図書館協議会（15名）が歴史資料室を見学（保坂一房）
- 16日 第132回 全国大学史資料協議会東日本部会研究会に参加（於法政大学多摩キャンパス）（山田兼一郎）
- 17日 多摩信用金庫本店にて金融史研究会に参加（保坂一房、植木郁夫）
- 23日 立川市史編さん委員会に参加（保坂一房）
- 23日 NPO法人共同保存図書館・多摩（多摩デポ）理事会リモート会議に参加（保坂一房）
- 24日 多摩信用金庫恩方支店へ『多摩のあゆみ』在庫運搬（坂田宏之、山田兼一郎）
- 26日 パルテノン多摩にてシンポジウム「多摩地域における史料保存の現状と課題」に報告者として参加（主催：人間文化研究機構「歴史文化資料保全の大学共同利用機関ネットワーク事業」／主導機関：国立歴史民俗博物館／共催：大学政策文化研究所「地域社会の持続と歴史的資源の保存・活用」チーム）（保坂一房）
- 28日 青梅市文化財保護審議会に参加（保坂一房）
- 29日 当室にてフォトグラファー・伊藤龍也氏と『多摩のあゆみ』（連載）に係る打合せ（坂田宏之）
- 31日 多摩信用金庫武蔵野支店にて東京大学准教授・小島庸平氏等と金庫資料調査（保坂一房）

IV 調査研究

論文

多摩地域ゆかりの写真家・伊与田昌男

—たましん地域文化財団所蔵「伊与田昌男コレクション」調査報告Ⅰ—

山田 兼一郎（歴史資料室）

はじめに

小稿は歴史資料室（以下、当室）が所蔵する「伊与田昌男コレクション」の利用・公開に向けた調査成果をまとめたものである。一般にあまり知られていないが、伊与田昌男（いよだ・まさお）は八王子出身の写真家として多摩各地の風景・風土を写真に収めてきた。



伊与田昌男（撮影場所：新宿／1969年）

当室が約 28,000 点にも及ぶ伊与田の写真資料（写真原板・紙焼き写真・スクラップアルバム等）の寄贈を受けたのは 1992（平成 4）年のことである。寄贈に至る背景を探ってみると当室の前身にあたる多摩文化資料室が事務局となっていた「多摩写真コンクール（主催：多摩中央信用金庫）」の審査員を伊与田に依頼しており、寄贈前から当室との交流関係が築かれていたようである。ただし当時の記録は乏しく、寄贈時には伊与田本人が他界していたこともあり、当室との関係性や伊与田の生涯・経歴について正確な情報を把握できていないのが現状である。

伊与田コレクションの内容に目を向けて

みると、1935 年から 1980 年代に撮影された作品群であり、撮影地は多摩地域のほかに東京区部や関東甲信越、北海道、東北、北陸、東海、近畿地方に及び、被写体は各地の子ども、農村・漁村、風景・風物・風俗、祭礼・祭事記など、様々なバリエーションをもつコレクションである。各地の風景・風物や人々の日常生活が生き生きと写し出されており、伊与田作品は地域史研究での活用が期待される貴重な写真資料といえる⁽¹⁾。しかし、その撮影者である伊与田昌男が何者なのか、どのような生涯を過ごし、どのような経歴をもつ写真家なのか、十分な検証がなされずに寄贈から 30 年近くを経過してしまった。

そこで、まずは伊与田の写真集『ふるさとの譜』（伸光社、1975 年）からその略歴を引用しておきたい。

伊与田昌男

八王子市に生る

日本美術学校図案科卒

オリエンタル写真学校卒

朝日新聞東京本社写真部員

海軍報道班員で南方従軍

時事新報社グラビヤ写真主任

保健同人社写真部長

現在フリー写真家

日本写真家協会員

同書の奥付からは、出生地や学歴・職歴を確認することができる。小稿ではこの経歴が時系列に並んでいると仮定して、この経歴順に調査成果をまとめていきたい。

1. 八王子町横山の伊与田家

伊与田の生家や出身地に関して、まずは『町田ジャーナル』第277号（1981年1月25日発行）の記事が非常に参考になる。

伊与田さんは八王子の現在の八王子大丸のところにあった小田原屋さんの次男坊

伊与田の実家は八王子の「小田原屋」という商店であり、伊与田家の跡地には「八王子大丸」があったという。この「八王子大丸」とは、1972（昭和47）年に甲州街道沿いの横山町3丁目に開業した大型百貨店のことである。その当時、経済成長期を迎えた八王子商業の中核を担っただけでなく、展覧会の開催やマーチングバンドの結成などを通して地域の文化振興にも大きく貢献した。しかし、地域商業の中心が1980年代前半から八王子駅周辺に移行したことで1985年に閉店⁽²⁾、現在は地上20階建てのマンション（現八王子市横山町18番7号）となっている。つまり、伊与田家が営む小田原屋はこのマンション周辺に立地していたと考えられる。そして、明治～昭和戦前期の文献や古地図において小田原屋の存在を確認することができた。



『大日本職業別明細図』（東京交通社、1937年）に掲載された「小田原屋漬物店」（国立国会図書館蔵）

詳しくは後述するが、伊与田は戦前・戦後期にかけて朝日新聞社の報道カメラマンとして活躍した経験をもつ。同社の名簿には「八王子市横山町53」という伊与田の住所が掲載されており、古地図で確認した小

田原屋の所在地は名簿の住所と重なる。そこで、八王子町横山の「小田原屋」という漬物店や同地域の「伊与田姓」について文献・現地調査を実施した。その結果を年代順に並べると以下のようになる。

①『八王子繁昌誌』（1899年発行）

本書には、「納税人名録」という付録があり、営業税を納めている者の納税額・住所・氏名が列記されている。この営業税納税者のなかに「八王子町横山 伊豫田新三郎」という人物を確認できた。なお、この新三郎という人物は営業税を納めていることから、商人だったと思われるが、具体的な店舗名や業種については不明である。

②『八王子案内 附・高尾山及近郊名所』（1911年発行）

本書には業種別に八王子町の商店が紹介されており、「漬物」の項には「小田原屋」と「いろは屋」が掲載されている。なお、店舗名のみで店主や住所などの情報は記されていない。

③『八王子商工案内』（1912年発行）

本書には、当時八王子で営業する商店の業種・住所・商号・電話番号・氏名といった情報が掲載されている。そのなかに「漬物 横山五三 小田原屋 伊與田マス」という記載がある。

④『市制祝賀会連合展覧会記念写真帖』（1918年発行）

本書は八王子市制の誕生を祝う記念誌である。当時は市制祝賀会協賛会が組織され、同書には「横山町一丁目」「八日町三、四丁目」「明神町」など町別に会員名が掲載されている。このなかに横山町3丁目の正会員として「伊與田新太郎」という人物が記されている。

この新太郎という人物の存在は同年代の金石文史料でも確認がとれた。横山町に鎮

座する八幡八雲神社境内に横山神社という小祠があり、この祠脇には2基の石碑が建っている。その1基が「大正8年10月」に建碑された「玉垣建設者氏名記」という石碑である。ここには、八幡八雲神社の玉垣建設に寄与した地域住民の氏名と寄付金額が刻まれており、617件の団体名や個人名が連ねられている。そして、ここに「伊豫田新太郎」の名が刻まれている。なお、各資料で漢字表記に異同があるものの、與・豫(ヨ)は音通で通用されていたとみて、同一人物と推測した。

⑤『商工信用録 46版』（1922年発行）

本書は全国7万人以上におよぶ商工業者の情報を調査したもので、責任者の氏名・職業・住所・開業年などが掲載されている。そのなかに「(姓名) 伊與田新太郎 / (職業) 漬物 / (店舗又は住所) 八王子市横山町 / (開業年月) 29年前」と記録されている。この新太郎という人物は④と同一人物であり、小田原屋の関係者とみて間違いないだろう。

⑥『東京横浜問屋便覧(訂5版)』

(1922年発行)

本書は東京市・横浜市・八王子市の各種商品製造業者および問屋・卸店の情報を調査・編纂したもので、八王子市之部の漬物商に「伊與田信一 (小田原屋) 横山町五三」との記載がある。

この信一という人物の記録は比較的多く残っており、『職業別電話名簿』や『日本紳士録』『大日本商工録』などに記載されている。なお、『帝国信用録 第34版』（1943年発行）が信一の動向を確認できる最後の記録である。

⑦『帝国商工録(分冊) 昭和11年度版』

(1936年発行)

本書には、全国の商工業者および営業者が掲載されており、東京府の萬漬物類(製

造)の項には「伊與田光次 八王子市横山町五三」という人物の記録が残っている。なお、店舗名は不明ながら業種と住所・責任者名(伊与田姓)が同一ということから、伊与田家が経営する小田原屋漬物店だと考えられる。ただし、同時期に信一と光次という人物がみられるが、その関係性は不明である。

以上の通り、③マス、④・⑤新太郎、⑥信一、⑦光次は伊与田昌男との続柄は不明ながら、家族・親族の可能性が高い。なお、伊与田家が営む漬物店・小田原屋の創業年は確定できていないが、遅くとも1890年代には創業していたのであろう。つまり、伊与田昌男は「八王子町横山53」の地で明治期に創業して昭和戦中期まで半世紀以上にわたり営業を続けた老舗漬物店・小田原屋で生まれ育ったと考えるのが妥当である。

2. 戦前期の写真活動

(1) 写真学校への入学

青年期の伊与田は美術学校で写真に関して専門的に学んでいた。美術学校以前の就学歴は確認できていないが、伊与田家の地域は八王子第一尋常小学校(現八王子市立第一小学校)の学区域にあたる。そこで、同校に大正期の卒業アルバム・卒業生名簿の保管状況を問い合わせたが、当時の記録は残されておらず、伊与田の在学記録を確認することはできなかった。



八王子市立第一小学校編『ひゃくねんのあゆみ』より転載(※赤印が小田原屋推定地)

写真の道を志した伊与田は「日本美術学校」と「オリエンタル写真学校」という学

調査研究

校で写真に関する専門教育を受けた。日本美術学校は 1917（大正 6）年に紀淑雄（美術史家・早稲田大学教授）によって創立された美術学校であり、伊与田は同校の「図案科」で写真を学んだ。伊与田の正確な入学時期は不明ながら、同校を継承した向南学園が保管している『日本美術学校 卒業生名簿（昭和 29 年 1 月現在）』（日本美術学校校友会、1954 年）によれば⁽³⁾、伊与田が第 19 回生（1938 年 3 月卒業）ということが確認できた。同校の当時のカリキュラムによれば、図案科は 3 年制となっており、カリキュラム通りに伊与田が修了していれば 1935（昭和 10）年入学と推測できる。伊与田と同じ「第 19 回生」で後にアニメーション映画界で活躍する持永只仁（図案応用科）が 1935 年 4 月に入学していることは参考になる⁽⁴⁾。

また、同校の校友会誌『日本美術』第 20 号（1938 年 4 月発行）には、①校友による洋画科教員・小島善太郎邸訪問記や②図案科教員・図案科生の紹介記事、③学友会主催の旅行記や④第 17 回日本美術学校生徒習作展覧会の記録などが掲載されている⁽⁵⁾。伊与田は①・②の記事中に登場、③・④の記事を執筆しており、これらの記事は伊与田の在学を証明する貴重な記録である。

つぎに、オリエンタル写真学校の概要を確認しておきたい。同校は淀橋区西落合に所在した写真学校である。1919 年に設立された日本最初の本格的な総合写真感光材料メーカー・オリエンタル写真工業（現サイバーグラフィックス）によって、1929 年に創立された。同校は開校当初、写真界の全体的なレベルアップと、自社製品への認知度を広めることを目的としていたが、次第に化学や芸術学といった専門的な教育カリキュラムを編成して、写真家育成の総合的な教育機関として、多くの写真家を世に輩出した。

同校の入学資格は「写真館主、オリエンタル写真学校の認定せる写真技術者、写真

館主の技術証明を有する写真技術者（三ヶ月以上）、及写真学校（三ヶ月）卒業者に於て尋常小学の義務教育を卒へたる者」となっており、修業期間は三ヶ月の短期速成の学校である⁽⁶⁾。伊与田の在学を証明する資料は未確認だが、日本美術学校卒業の資格をもって同校の入学資格を満たしたと考えれば、1938 年 3 月以降に入学したことになるだろう。

同校の生徒について「生徒の大半は写真館や、写真材料店の子供達で、将来は町で写真館を開業する希望者が多い」と評されており、家業を継ぐための入学希望者がほとんどのようである。なお、記者が校内で将来について取材した際に「僕は報道写真とか、記録映画とか、そういふ方面へ進出しようと思つてみます」と語った生徒を「この若い講習生はなかなか、文化的なヒラメキがある」と評しており、同校では伊与田のような境遇や将来像をもつ生徒は少数派だったと考えられる⁽⁷⁾。

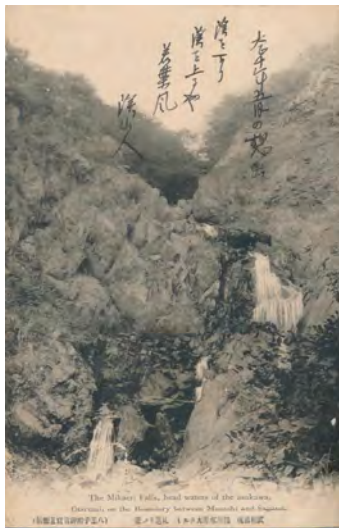
なお、この学歴の調査によって伊与田コレクションが学生時代からの作品を含んでいることを確認することができた。この点について詳しくは後述する。

（2）八王子の写真文化

伊与田が生まれ育った八王子は多摩地域のなかでも早くから写真文化が隆盛した地域とみることができる。八王子の営業写真館の草分け的な存在は 1877（明治 10）年創業の神宮写真館であり、明治期の文献には同館店主・神宮助五郎（八王子町横山）や喜笑堂写真館・安西権五郎（八王子町八日）、市川写真館・市川宗三（八王子町横山）、写真師・金岡直太郎（八王子町本町）などの八王子における草創期の写真文化を形成した関係者の存在が確認できる⁽⁸⁾。

大正期を迎えると、とくに第一次大戦下の好景気による国民所得の上昇はカメラの普及や写真文化の大衆化を促した。すでに明治末から日本各地で写真団体が結成され

るなかで、多摩地域においては 1916 年に八王子で「多摩写友会」が発足された⁽⁹⁾。同会は「素人寫眞娛樂家より成る」というようにアマチュアの写真愛好家による団体を標榜している⁽¹⁰⁾。同会は明治期創業の市川写真館二代目店主・市川英作やアマチュア写真愛好家・梅澤昌晴、小川吉麿の 3 名が始めた団体である。少し話は逸れるが、彼らの活動は写真愛好に止まらず、精神の修養・人格の向上を目指す修養会設立に向かい「薫心会」の発足につながる。市川は結果的に薫心会での活動を端緒として「八王子教育運動最大の功労者」と称された人物である⁽¹¹⁾。このように、八王子の写真関係者と地域文化運動の担い手たちが重複することは、これまであまり注目されてこなかった視点である。



神宮写真館が発行した名所絵葉書（当室所蔵）
撮影地は浅川水源の大垂水・見返りの滝（大正期カ）

写真団体の話題に戻すと、1917 年 12 月には、「府下八王子市の写真師中重なる者三名は相互の親睦」のための会合を催したという。これは市川・神宮・平林の 3 氏が企画した「八王子（市）写真師会」のことである⁽¹²⁾。そして、1921 年 7 月に「八王子写友会」が誕生して、同年末には八王子写友会と先述の多摩写友会が合同作品展覧会を開催するなど、地域の写真団体が相互連携していた様子も確認できた⁽¹³⁾。

さらに、1921 年までに八王子町横山で

「八王子写真師組合」が組織されていた⁽¹⁴⁾。それから数年後の 1925 年当時、同組合の所在地は「八王子市横山町 53」となっており、ここには神宮写真館が位置していた⁽¹⁵⁾。推測ではあるが、同組合は神宮写真館を中心に組織されていたのだろう。

また、先述の「八王子（市）写真師会」は一時中断していた活動を 1934 年に再開し、横山町萬林亭にて創立発会式を挙行了した⁽¹⁶⁾。当時のメンバーは以下の通りである。

会 長：神宮 稔介
副会長：鈴木 忠典
会 計：大牧 留治
評議員：板橋 長吉 薄井 益太郎

会長は神宮写真館二代目店主の神宮稔介が務めており、八王子の写真師・写真館のリーダー的な存在が神宮家だということは想像に難くない。ちなみに、評議員の薄井益太郎は八王子における童謡・童話・舞踊の啓蒙・普及活動を行い、地域における児童文化の分野で大きな功績をあげた⁽¹⁷⁾。市川の活動と同様に薄井の例も写真関係者と地域文化運動のつながりを示している。

1920 年代後半から 1930 年代初頭、八王子で写真館を営業していたのは、先述の神宮写真館、市川写真館、板橋写真館（大横町）、鈴木写真館（南新町）、氷川堂写真館（氷川）の 5 館、個人営業は 4 名となっている⁽¹⁸⁾。約 30 年前の明治期から写真館や写真師の数に大幅な増減がみられないとすれば、大正期における写真団体の活発な活動は写真愛好家たちが支えたのであり、営業写真館と彼らが相互に交流をもった結果として、「写真」を八王子の大衆文化の一つとして根付かせていったのであろう。

さて、八王子の写真文化と伊与田の関係で注目すべきは、伊与田家（小田原屋）と神宮家（神宮写真館）の所在地が同じ「八王子町横山 53」だということである。さらに、伊与田の幼少期には多摩写友会・八王子写友会や八王子写真師会・八王子写真師

調査研究

組合など、複数の写真団体が八王子を中心に活発な動きをみせていた。つまり、伊与田家が立地する横山地区は多摩地域のなかでも写真文化の先進地域ともいえる場所だったのであり、生家の隣地に神宮写真館が位置していたという生活環境は少年・伊与田の将来像や職業選択に小さくない影響を与えたと推測している。

(3) 初期の写真活動

伊与田コレクションのなかでも最も古い時期の作品は 1935 年に撮影された写真であり、撮影当時の伊与田は日本美術学校で学んでいた時期と推察される。作品集『ふるさとの譜』の「あとがき」で「子供の世界にひかれて、私のカメラがそれを追いはじめたのは昭和 10 年頃からであった」と述べており、伊与田作品の特色ともなる「こども」を被写体とした写真には学生時代から取り組んできたことがわかる。



学校帰り（八王子市長沼／1935年）

それから、伊与田の写真が掲載された新聞・雑誌などから最初期の活動を確認すると、はじめて写真コンテストに入選したのは 1939 年のことである。伊与田は「当時、アルスの高桑勝雄氏、石津良介氏。アサヒカメラの松野志気雄氏らの御指導によって、写真雑誌『カメラ』や『アサヒカメラ』の月例作家となり、日本写真年鑑やアルス写

真年鑑などに作品を発表」したと記している⁽¹⁹⁾。ちなみに、現在確認できる範囲では、アマチュア向け写真雑誌『カメラ』誌上で開催された第 211 回月例写真競技審査（第 1 部）への入選が写真家・伊与田の雑誌デビューとなる⁽²⁰⁾。この雑誌は「全日本カメラ倶楽部」の機関誌という位置づけで、『カメラ』編集担当の主筆・高桑が同倶楽部の責任者として、アマチュア写真家たちを後援・指導する立場にあり、伊与田もその指導を受けていたのである。会則によれば、同倶楽部は会員の特典として機関誌『カメラ』の定期購読、倶楽部主催の会合や競技会・展覧会への参加資格などが与えられていた。

なお、支部設立も会員特典の一つとなっており、1940 年 8 月に誕生した八王子支部は若干 26 歳の伊与田が会員 7 名の代表についた⁽²¹⁾。この八王子支部はいつしか「桑都光画連盟」と名乗り、伊与田を中心に活動を継続していく⁽²²⁾。そして、桑都光画連盟は市内の文化団体を結集させた「八王子文化聯盟」の活動にも加わっていた⁽²³⁾。ちょうど伊与田が写真活動を始めた 1930 年代から 40 年代にかけて、八王子では地域文化運動が盛んになり、地元の質屋店主、画家、作家、郷土史家たちが集い「桑都文化協会」が結成された⁽²⁴⁾。

同協会がのちに八王子文化聯盟へと発展するのだが、この文化運動の先導者が作家・瀧井孝作や洋画家・小島善太郎である。先述の通り、日本美術学校時代の伊与田は小島と学生・教員の間柄であり、小島邸を訪問して指導を仰ぐような親しい関係性を築いていた。これを考慮すれば、伊与田を代表とする桑都光画連盟が地域文化運動に参加するきっかけとして、小島の存在を念頭に入れておくべきである。そして、今後は八王子の地域文化運動の担い手の一人という視点で、写真家・伊与田の活動や地域ゆかりの文化人たちとの交流関係を再検証していく必要があるだろう。

3. 戦中期の写真活動

(1) 戦時体制と報道写真

1930年代末から1940年代にかけての伊与田は報道写真の方面で活動する様子が見受けられる。朝日新聞社社史編修センターの情報提供によって伊与田の朝日新聞社における職歴が判明した。これをまとめると以下のようなになる⁽²⁵⁾。

従軍前の伊与田は1941(昭和16)年から朝日新聞社町田通信部の嘱託通信員となり報道カメラマンとしてのキャリアをスタートさせていた。さらには、入社前から同社と伊与田の接近はうかがわれ、先述した『アサヒカメラ』の編集長・松野との関係もその一つであろう。

昭和16	1941	不明	27歳	朝日新聞社町田通信部嘱託通信員となる
昭和17	1942	4月27日	28歳	朝日新聞社の「準社員」に試用 朝日新聞社東京本社編輯局員(写真部勤務)
		10月27日		朝日新聞社の「準社員」に登用
昭和18	1943	1月1日	29歳	朝日新聞社東京本社編輯局員(写真部勤務)となる
		7月1日		「応召応徴者名簿」に「局員(徴・報道班員)」とある
		10月		「陸軍特派員、海軍報道班員配置表」に「海軍報道班員解除目下スラバヤにて入院中」とある
昭和19	1944	1月15日	30歳	朝日新聞社東京本社編輯総局員(写真部詰)となる 社員名簿の住所は「八王子市横山町53」
		7月1日		朝日新聞社の「社員」に登用される
		9月1日		朝日新聞社東京本社編輯総局員となる
昭和20	1945	9月1日	31歳	朝日新聞社東京本社編輯局員となる
昭和21	1946	7月1日	32歳	朝日新聞社東京本社写真部員となる
昭和22	1947	6月1日	33歳	朝日新聞社東京本社編輯局員となり、病気休職
昭和23	1948	11月30日	34歳	病気休職による満期退社

※本表は朝日新聞社社史編修センターからの情報提供に依拠している。
 出典は同センター所蔵の月刊社内報 朝日社報、社員名簿、応召応徴者名簿
 陸軍特派員・海軍報道班員配置表などである。

1940年代になると、国策の変化とともに各地のアマチュア写真家が「報道報国」というスローガンのもとで報道写真の方面に動員されていく。同時期に朝日新聞社が企画した「戦線将士写真慰問」は「地方の写真アマチュアを動員し、アマチュアらしい写真の利用法によつて事変下の銃後に役立つことは、極めて意義深い」と評価されており、写壇からも好感をもって迎えられていた⁽²⁶⁾。慰問写真とは、戦中期の写真家たちに奉仕活動という名目で出征兵の家族や郷里の風景を撮影させた写真のことで、これをアマチュア写真家たちから募集した。

この企画を大規模に行なった最初の事例は朝日新聞社・全関東写真連盟主催の「郷土将士カメラ慰問」であり、集まった写真のなかから優秀作品は『東京朝日新聞』や『アサヒカメラ』に掲載された。

次の写真は「郷土将士カメラ慰問(1)」と題して『東京朝日新聞』1940年1月20日朝刊に掲載されたもので、1940年頃に伊与田が撮影した八王子市小宮町石川・門倉岩次郎一等兵の家族の様子である。また、同時期の伊与田は八王子市由井村出身・小杉久雄一等兵の留守宅を訪問して慰問写真を撮影しており、この写真は『アサヒカメラ』に掲載された⁽²⁷⁾。八王子における慰問写真に関する活動は、伊与田の他にも八王子写友会や八王子遼東写友会がカメラ隊を組んで撮影を行っていた。撮影地となった市内小宮町や境村(現町田市)・大久野村(現日の出町)では、町長からの謝辞や各部落の青年団や婦人会による道案内など、写真家たちが地元から好意的に迎えられた様子が伝わる⁽²⁸⁾。



『東京朝日新聞』に「推薦第一席」として掲載された伊与田の「腕白坊」

アマチュア写真家たちは各人の思想的な背景とは別に戦時下において写真活動を継続するためには、戦時体制に動員・編成され「写真報国」の精神を受け入れる必要があった。伊与田もまたこの時代の制約を体

験した写真家の一人であり、最終的には報道班員として戦地に赴くことになる。

(2) 報道班員として戦地へ

戦地へと向かう伊与田は、朝日新聞社の嘱託通信員から東京本社編輯局員（写真部員）となり準社員待遇にキャリアアップしていた。そして、1943年7月1日付の「応召応徴者名簿（社史編輯センター所蔵）」に名を連ねており、この頃に報道班員として徴用されたと推測できる。戦地の様子について、伊与田本人が残した記録は写真のみであり、貴重な戦争記録ではあるが戦地での足跡を追うには断片的な情報と言わざるを得ない。ただし、同時期に徴用されたとされる作家・久生十蘭（本名：阿部正雄）の『従軍日記』に伊与田らしき人物を確認することができた。これはのちに直木賞作家となる久生が海軍報道班員として南方従軍中に書き留めた日記である⁽²⁹⁾。

久生の日記には「日本出立の七人組」という祖国からともに南方従軍へ参加した人物が登場する。講談社文庫版の解題を担当した小林真二氏はこのメンバーや配属先について「〈七人組〉のほか六名は、カイマナ（阪田・山本）、アンボン（天城）、ケンダリ（伊豫田）、マカッサル（上村・眞船）といずれも比較的前線近くに配属された」との解説を加えており、このなかの「伊豫田」という人物が伊与田昌男と考えられる⁽³⁰⁾。

1943年4月4日、久生の日記には「セレベスのケンダリへ配属されていた伊豫田君、肺をやられたよしで突然飛行機で帰ってくる。あす入院するよし。」とある。伊与田は配属先となったインドネシア・スラウェシ島の州都ケンダリで肺を患い入院のためスラバヤに移動してきたという。

なお、これは同年10月中旬現在の朝日新聞社報道班員の動向をまとめた「陸軍特派員 海軍報道班員配置表（社史編修センター所蔵）」の「海軍報道班員 解除目下ス

ラバヤニテ入院中」という記述とも合致しており、久生のいう「七人組」の一人は伊与田とみて間違いないと考えられる。

伊与田はスラバヤへの帰還翌日に海軍病院へ入院することになるが、それまでの僅かな時間でこれまで親交が薄かった久生と徴集当時の思い出話や配属先での近況を語り、繁華街でショッピングや食事を楽しんだという。入院翌々日の4月7日には「（前略）ダルモの海軍病院へ行く。受付で面会簿に記入し、病棟をたづねて行く。伊豫田の同室にひどい重症の患者あり。」と記されており、伊与田を見舞うために久生たちは海軍病院を訪れていた。久生はこの時のことを「伊豫田君判任官待遇の不平や食事の不平などいろいろ。ききにくし。いい加減になだめて匆々引上げる。」と回想している。この記述は、報道班員として任用された伊与田が判任官待遇だったことを示す貴重な記録である。報道班員の待遇は学歴で区分されており、中学校卒業以下は判任官、専門学校・大学卒業者は奏任官待遇となる。先述したように、伊与田が卒業した美術学校の入学資格は尋常小学校卒業であり、学歴からもその待遇を裏付けることができる。

つぎに、海軍病院入院後の伊与田の動向に関する手がかりを得るため、伊与田コレクションの従軍写真に注目してみたい。この中には「従軍 氷川丸にて」というタイトルが付けられた写真がある。これは、戦時中に病院船として活躍した有名な大型船「氷川丸」である。1930年に日本郵船がシアトル航路用に貨客船として建造したもので、戦中は海軍特設病院船、終戦直後は復員・引揚船として航路につき、終戦後にはふたたび豪華客船となり、現在は横浜市の山下公園前に係留されて一般公開されている。

氷川丸の船内で撮影されたであろう下記の写真は、従軍中の伊与田が氷川丸に乗船していたことを示す貴重な写真である。

船上から船体を撮影した写真には、煙突の船尾側に立つ十字型が写っている。これは電灯式赤十字マークであり病院船の標章となるもので、1943年5月の改装工事で付けられたものだという⁽³¹⁾。そして、同年6月1日に久生が海軍病院にいる伊与田の見舞いに訪れ、先述の「配置表」は10月中旬まで入院中と記録している。これらをふまえると、伊与田は帰国時に氷川丸へ乗船したのではないかと推測される。

そこで、伊与田の帰国時期（1944年1月以前）を鑑みて氷川丸の航海記録を確認したところ、第15次航（1943年9月9日～11月4日）または第16次航（1943年11月16日～1944年1月11日）で日本に帰国した可能性が考えられる⁽³²⁾。



煙突の船尾側に設置された電灯式赤十字マーク



戦時中に使用されたカタカナ表記の救命ブイ

そして、伊与田は1944年1月時点で朝日新聞社東京本社の勤務となっており、社員名簿によればこの時の住所は従軍前と同じ「八王子市横山町53」となっていた。つまり、この時期にはすでに帰国して日本国内で生活を営んでいた。同年7月には、正式な朝日新聞社の「社員」に登用されている。しかし、1947年6月に仕事を病氣休職、翌年11月には休職に伴う満期退社を迎えている⁽³³⁾。

（2）従軍写真について

伊与田コレクションのなかには伊与田本人がタイトルやメモに「従軍」と記した写真が89枚含まれており、戦争記録として貴重な写真である。各写真の情報は現在調査不十分ながら、今後の調査進展を期していくつかの写真を掲載しておきたい。

【従軍 ジャワ スラバヤにて】





【従軍 チモール島 クーパン】



【従軍 ダバオ・メナド・マカッサル・ジャワ セレクタ】

4. 国立東京療養所での療養生活

(1) 俳聖・石田波郷との交流

伊与田が戦後間もない時期に療養生活を送ったのは、結核療養を目的として設立された国立東京療養所である。伊与田の入退所の時期は不明ながら、所内での活動記録などから 1949（昭和 24）年から 1950 年代中頃までは東京療養所で療養生活を送っていたと推測できる。

伊与田の療養生活のなかで特筆すべき出来事として、俳聖・石田波郷との出会いがある。この 2 人はほぼ同世代にあたり（波郷が伊与田の 1 年先輩）、愛媛県生まれの波郷は地元の松山中学校在学中に俳句を始め、上京後は「馬酔木」主宰の水原秋桜子についた。

波郷は太平洋戦争中に召集をうけて中国に派遣されたが、戦地で肺疾患を患い日本に送還される。帰国後、静養先で終戦を迎え、体調も回復して句会などの活動を再開していたが、1947 年に再び体調を崩して結



核を発病していたことが判明する。偶然ではあるが、戦地で肺を患い帰国後に結核を発病、東京療養所へ入院という経歴は伊与田と類似する。

波郷は清瀬市に所在した東京療養所での治療・手術を希望して1948年5月に入所、1950年2月まで同療養所で療養生活を送った⁽³⁴⁾。この療養所が2人の出会いだったと考えられる。下記の通り、伊与田コレクションには波郷を撮影した写真が含まれており、2人の関係性がうかがわれる。



新春句会の石田波郷

また、波郷が療養生活を綴った随筆集『清瀬村』には伊与田撮影の写真が3点掲載されている。同書の発行は波郷が退所後の1952年のことである。あとがきには「同じ療養所の同じ病棟にゐた伊与田昌男氏から清瀬村のすぐれた写真を寄せて戴いた」とあり、療養生活中の2人の交流をきっかけとして、同書に伊与田作品が掲載されたのである。

波郷は同書で「私が入る七寮は病棟の一番外れで深い林に面し部屋も緑に染まるばかりだった。同室六人、廊下に面した窓際のベッドを与へられた」と記しているように、療養所敷地内で一番南側の病棟で生活を送り、伊与田も同じ病棟で療養生活を過ごしていた。この写真は同書に掲載された写真の1枚である。題名は「雪の療養所」であり、「左側の療棟が石田波郷氏の入室

されてゐた所」と伊与田本人のものと考えられる解説が添えられている。



雪の療養所(波郷著『清瀬村』掲載写真)

この南7療の近くには、療養所内の講堂として様々なイベントで利用されていた「壽康館」が位置していた⁽³⁵⁾。ちなみに、波郷と親交のある著名な俳人・中村草田男が壽康館の西廂に腰かけた写真が『俳句苑』1-3(1952年7月発行)という俳句雑誌の口絵になっている。じつは、この写真も伊与田が撮影したもので、撮影日は1951年10月28日と記されている。当時、波郷はすでに退所していたが、伊与田は療養生活を続けていた時期にあたる。恐らく、伊与田は波郷との交流を通じて俳文学界につながる人脈を築いたのであろう。ちなみに、伊与田コレクションのなかには芸能人・文化人たちの肖像写真が多数含まれており、『俳句苑』の口絵写真とは別の時期に撮影された草田男の肖像写真も確認できた。



『俳句苑』口絵(左)と肖像写真(右)

(2) 療養所内での写真活動

療養生活を送るなかで患者たちは娯楽として様々な文化・芸術のサークル活動を楽しんだという。その一つが前節でみた波郷を中心とした「俳句」である。また、伊与田が専門とした「写真」を楽しむ団体も存在していた。それが伊与田と療養所内の仲間たちが結成した「光陽クラブ」であり、伊与田コレクションのなかには、その活動歴を伝える写真が含まれていた。



光陽クラブ参加作品展

(前列左から3番目が伊与田)

この光陽クラブに関して、会員は当然ながら療養中の患者なので軽患者の A 会員、重患者の B 会員（読書会員）というように症状によって二部制になっていた。毎月開催される同クラブの例会では、各々の作品研究をはじめ、クラブ OB による退所後の職場経験を語って貰う機会などを提供していた。所内にはクラブ専用の暗室が設けられて「所内の宣伝用写真や、学術写真、患者の記念撮影にいたるまであらゆる写真の製作に協力」するなど活発に活動していたことが確認できる⁽³⁶⁾。伊与田コレクションのなかにも所内の風景をはじめに治療・手術の様子、患者・病院関係者の写真や所内の行事を撮影した写真が多数含まれている。同クラブの「会員の指導には伊与田昌

男氏が当り、中央写壇の権威者を随時招いて講習を受けている」とあるように、伊与田が同クラブの指導的な立場にあった⁽³⁷⁾。

また、結核研究所図書室が複製版を所蔵する中村勝治旧蔵『東寮の想ひ出（其の一）（其の二）』という 2 冊のアルバムでも光陽クラブの活動の様子が確認できた⁽³⁸⁾。旧蔵者である中村勝治氏は中島飛行機で航空技師を務めた人物であり⁽³⁹⁾、伊与田とは光陽クラブで共に活動した写真仲間にあたる。



福田勝治先生を招いてお話を聞く

(前列中央が福田、右隣が伊与田、後列一番左が中村)

公益財団法人結核予防会結核研究所所蔵

中村旧蔵アルバムには 1950 年 11 月 4 日、同クラブの活動として写真家・福田勝治を招いた座談会の記念写真が収録されている。福田は戦前から戦後の一時期において、写真界の大家である木村伊兵衛や土門拳を凌ぐほどの大衆的な人気を誇った写真家である。とくに女性を被写体とした写真を得意として、1937 年には『女の写し方』（アルス）という撮影技法に関する著作で一躍有名になる⁽⁴⁰⁾。

光陽クラブは 1952 年に伊与田を責任者とする会員 15 名の写真団体として写真年鑑に掲載された⁽⁴¹⁾。その後、1954 年までに会員数 80 名を擁する団体に成長していた⁽⁴²⁾。写真家の渡辺義雄が「長い療養所生活の中で写真愛好家を集めて自ら写真術の手引きをされ、写真展を催すことなどもあって、熱心な人のなかには療養所を出られてから

写真を本業として成功されている方もある」と述べており⁽⁴³⁾、同クラブで伊与田の指導を受け、退所後に写真を稼業とした療友もいたようである。



所内で開催された伊与田昌男撮影「人物写真展」

療養中の伊与田はクラブの指導者として活動するだけでなく、一人の写真家として展覧会の開催や外部の写真コンテストに挑戦して写真技術の向上を目指していた。上記の写真は療養所内で開催された伊与田の写真展の様子である。「人物写真展」と題された展覧会の被写体は療養所の医師たちである。伊与田の写真技術は医師にも注目されたようで、療養所の外科医長を務めた宮本忍は伊与田が撮影した写真を自身の論文や監修した事典に図版として利用している⁽⁴⁴⁾。

また、療養中の伊与田はニッコールクラブというニコンのカメラ・レンズ愛用者の親善友好を目的とした団体が主催する「ニッコールによる写真懸賞」に入選している。この審査には、日本を代表する写真家の木村伊兵衛や土門拳、アマチュア写真界の発展に尽力した三木淳や西山清が参加していた。ここでは、1954年に開催された第2回入選作品展の写真に掲載した。この審査で伊与田は第2部（カラー）の特選を受賞している⁽⁴⁵⁾。



入選作品展における伊与田と会場風景

この時期の伊与田は雑誌『保健同人』『アサヒカメラ』『日本カメラ』などに作品が掲載されており、『アサヒカメラ年鑑（臨時増刊アサヒカメラ）』（1952年発行）の「写真関係者名簿」では職業「雑誌記者」の肩書となっている。とくに、医療系雑誌を手掛けていた保健同人社は後に伊与田の勤務先となるが、療養後の詳しい経歴や写真活動の検討については別稿を期したい。

おわりに

小稿では、八王子市出身の無名の写真家・伊与田昌男について、彼の前半生を中心に、横山町の伊与田家やその家業である漬物店・小田原屋のこと、戦前期の学生・アマチュア時代や報道カメラマンとしての活動、そして戦中期の南方従軍と終戦後の療養生活について考察してきた。いまなお、

調査研究

調査不足の点も見受けられるが、今後の更なる調査研究を進めるべく現時点までの成果をまとめた。

伊与田の経歴を改めて見直してみると、伊与田が大正デモクラシー期の八王子で隆盛した地域文化運動や写真文化の発展に寄与した関係団体の一員ということが判明した。また、太平洋戦争期の伊与田は政府プロパガンダの一翼として「写真報国」のスローガンのもと多くの写真家たちと同じように国策宣伝の担い手となり、そして最終的には「報道班員」として戦地に赴くことになった。青年期の伊与田は戦争という運命に翻弄されながらもひたむきに「写真」と向き合い、その時代を必死に生きた若者の一人だったのである。

南方従軍から帰国して無事に終戦を迎えた伊与田だったが、今度は「国民病」「亡国病」と恐れられていた結核を発症してしまう。過酷な勤務かつ集団生活が強いられた軍隊経験者には結核患者が相次いでいたようで、伊与田の結核発症も従軍の影響なのであろうか。戦争は終戦後の伊与田の生活にも暗い影を落とし、伊与田は結核療養のため清瀬村の国立東京療養所へ入所することになる。このエリアは清瀬病院など10件以上の療養所が集中したことで「病院街」を形成し、結果的には結核療養の聖地として「清瀬」の名を全国に広めることになる。伊与田の写真作品や写真活動は同地域と結核患者のあり方を検証する事例として活用すべきである。これについては今後の課題としたい。

伊与田の戦前・戦後期の写真活動は八王子の地域文化運動の展開、結核療養の地・清瀬という地域像など、偶然にも多摩各地の近現代史を特徴づける歴史的事象との関係性が見受けられる。これは伊与田コレクションを活用した地域史研究の新たな可能性を示唆するものである。伊与田の生涯や写真家としての経歴を調査すること、その写真作品の利用公開を進めることが、多摩

地域の歴史解明につながると考えている。

なお、今回は報告することができなかった伊与田の後半生に関して、少なくとも1960年代には家族と保谷町（現西東京市）へ居を移しており、ここが伊与田の終の棲家となった。つまり、伊与田は「八王子」で生まれ育ち、太平洋戦争後の療養生活を「清瀬」で送り、回復後から亡くなるまでを「保谷」で過ごした。このように、伊与田は多摩地域での生活を中心に人生を歩んできたのであり、その生涯は正真正銘「多摩地域ゆかりの写真家」と称されるべきものだったのである。

【付記】

末尾になりますが、原稿作成の過程で次の方々からご助言とご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。（敬称略）

八幡八雲神社 明野 進 倉島篤行 佐藤和美
田中泰行 前田浩次 野地芳男 宮崎紀子

参考文献

- 飯沢耕太郎『日本写真史を歩く』筑摩書房、1999年
緒川直人・後藤真編『写真経験の社会史—写真史科学の出版—』岩田書院、2012年
島原学『日本写真史（上）』中央公論社、2013年
白山真理『〈報道写真〉と戦争』吉川弘文館、2014年

- (1) 伊与田の写真作品はすでに多摩地域の博物館や自治体史編さんに活用されている。例えば、八王子市郷土資料館編『写真でつづる八王子の歴史』（八王子市教育委員会、1980年）、『八王子市郷土資料館常設展示ガイドブック』（八王子市教育委員会、2018年）、清瀬村誕生120周年記念写真展実行委員会・記念写真集編集委員会編『写真集 清瀬・村から町へ、そして市へ＝120年のあゆみ』（清瀬市郷土博物館、2010年）、『市史研究 きよせ』第8号（清瀬市市史編さん室、2023年）など。
- (2) 松岡喬一『年表に見る八王子の近現代史 明治元年～平成12年』（かたくら書店、2001年）を参照。
- (3) 閲覧にあたっては、田中泰行氏（学校法人向南学園理事長）に便宜を図っていただいた。
- (4) 持永只仁『アニメーション日中交流記 持永只仁自伝』（東方書店、2006年）を参照。
- (5) 東京文化財研究所所蔵。
- (6) 『フォトタイムス』13-6、1936年。
- (7) 小山内龍「写真学校 卒業生は何処へ行く」（『報道写真』1-3、1941年）。
- (8) 二宮真彦（容軒）等編『一府九県連合共進会手引草 一名・八王子案内』（文華堂、1899年）、八王子市郷土資料館編『明治時代の八王子』（明治時代の八王子展実行委員会、1993年）所収『武蔵文庫 百家明覧』（1910年発行）、アサヒタウンズ編『多摩に生きる 100人 草の根にんげん万歳』（武蔵野書房、1992年）などを参照。
- (9) 前掲（註2）松岡『年表に見る八王子の近現代史 明治元年～平成12年』を参照。
- (10) 『写真新報』214（7月号）、1916年。
- (11) 橋本義夫「八王子に於ける教育運動－薫心会を中心として－」（『教育』7-11、1930年）、同『地方文化研究資料第36集 地方の教育運動』（地方文化研究会、1959年）ともに同著（色川大吉・梶国男・清水英雄編）『橋本義夫初期著作集 沙漠に樹を』（揺籃社、1985年）所収。
- (12) 『写真月報』22-12、1917年。この3名と同姓の人物が島村愛次郎編『八王子案内 附・高尾山及近郊名所』（熊沢文華堂、1911年）に写真師として記載されている。
- (13) 『写真月報』26-10、1921年と『写真新報』281（2月号）、1922年を参照。
- (14) 八王子市史編纂委員会編『八王子市史 上巻』（八王子市、1963年）694頁掲載「大正一〇年度八王子商工業同業組合一覧」を参照。なお、この一覧に「八王子写真師組合」の所在地は記載されていない。
- (15) 『大正十四年度商工統計一斑（附八王子案内）』（八王子商業會議所、1925年）を参照（当室所蔵）。
- (16) 『写真新報』44-2、1934年。
- (17) 八王子地方教育百年史展実行委員会編『八王子の教育』（八王子市教育委員会、1972年）、梶国男「陵東土俗研究会－安齋英男・小松繁盛－」（『土の巨人』たましん地域文化財団、1996年）を参照。
- (18) 『日本写真年鑑（第5年版）』（朝日新聞社、1929年）、千葉勝重編『八王子の建設と経済』（八王子経済研究会、1932年）を参照。なお、写真館が会社経営または個人経営なのか判断する材料がないので、ここでは各資料から得られた実数を提示するのみに留める。
- (19) 伊与田昌男『ふるさとの譜』（伸光社、1975年）の「あとがき」を参照。
- (20) 『カメラ』20-2、1939年に「女の顔」（八王子郊外・1938年12月撮影）が掲載されている。
- (21) 『カメラ』21-10、1940年。
- (22) 『カメラ』21-11、1940年に「八王子支部桑都光画連盟」という団体名で記載されている。なお、桑都光画連盟は1940年2月には結成されており（『アサヒカメラ 臨時増刊最新の寫真知識』朝日新聞出版、1940年）、全日本カメラ倶楽部八王子支部の方が遅れて誕生している。どちらも、八王子で活動する団体であり、恐らく伊与田等が個人的に立ち上げた団体を全日本カメラ倶楽部の支部に移行したと考えるのが妥当であろう。
- (23) 『東京日日新聞（府下版）』1941年1月14日。
- (24) 戦時下における八王子の文化運動については、八王子市史編集委員会編『新八王子市史 通史編6 近現代（下）』（八王子市、2017年）を参照。
- (25) 同センター所蔵資料の掲載情報に関しては、前田浩次氏（朝日新聞社社史編修センター長）よりご教示いただいた。

調査研究

- (26) アサヒカメラ『日本写真年鑑（昭和15年版）』（朝日新聞社、1940年）。
- (27) 『アサヒカメラ』31-4、1941年。
- (28) 「沸く感激の声」「感謝の渦巻」（『アサヒカメラ』31-1、1941年）、「赤誠のカメラ慰問行」（『アサヒカメラ』31-4、1941年）などを参照。
- (29) 久生十蘭「従軍日記」（『定本 久生十蘭全集 10』国書刊行会、2011年）。久生の動向については全て同日記を参照した。
- (30) 『久生十蘭「従軍日記」』（講談社、2012年）。なお前掲（註29）で確認したところ、「伊豫田（1箇所）」の他に「伊予田（1箇所）」という記載も確認できた。記載内容からどちらも「伊与田昌男」のことを指していると考えられる。
- (31) 氷川丸関係の写真に関しては、明野進氏（日本郵船歴史博物館・館長代理）によるご教示。
- (32) 伊藤玄二郎『氷川丸ものがたり』（かまくら春秋社、2015年）。ただし、この推測には以下の克服すべき課題が残っている。第15次航はスラバヤを經由（1943年10月3日寄港・10日発航）して11月4日に横須賀へ帰着する。伊与田の入院先であるスラバヤを經由しているが「配置表」の時期とは齟齬がある。第16次航はマーシャル群島の島々とパラオを經由して帰国しており、スラバヤとは地理的な隔りがある。
- (33) 前掲（註25）と同じく前田氏によるご教示。
- (34) 清瀬市市史編さん室．“きよせ結核療養文学ガイド ブンガくんと文学散歩【石田波郷(東京療養所)編】”．清瀬市．2023年5月1日 <https://www.city.kiyose.lg.jp/bunkasportskankou/rekishi/shishi/1009191/1009879/index.html>
- (35) 同窓会記念誌編集委員会編『雑木林－清瀬病院の思い出－』（国立療養所清瀬病院同窓会、1984年）。
- (36) 「写真団体ニュース」（『アサヒカメラ』37-12、1952年）。
- (37) 前掲（註36）参照。
- (38) 中村旧蔵アルバムに関して、利用公開にあたっては倉島篤行氏（結核研究所顧問）、閲覧にあたっては佐藤和美氏（同研究所図書室司書）に便宜を図っていただいた。
- (39) 中村旧蔵アルバムについては、工藤翔二「昭和20年代の療養生活－中村勝治氏のアルバム」（『複十字』No.407、2022年）を参照。
- (40) 飯沢耕太郎．“没後20年 孤高のモダニスト 福田勝治 写真展”．artscape．2023年5月1日 https://artscape.jp/report/review/1229362_1735.html
- (41) 『アルス写真年鑑 1952年版』（アルス、1952年）。
- (42) 『アルス写真年鑑 1954年版』（アルス、1954年）。
- (43) 渡辺義雄「伊与田氏の写真について」（伊与田昌男『ふるさとの譜』伸光社、1975年）。
- (44) 宮本忍「麻酔（2）」（『自然』1-81、1953年）、宮本忍・島村喜久治監修『結核の事典』（筑摩書房、1953年）。
- (45) 『ミニ・フォト』2-1、1954年。

編集後記

『多摩の歩みとともに』（多摩中央信用金庫、1974年）発行から2023年は50年目を迎えた。これは多摩中央信用金庫の創立40周年記念誌として発行されたものだが、同書の企画・編集作業が歴史資料室の前身となる多摩文化資料室の設置に深く関係している。つまり、当室のあゆみを振り返れば、今年の一つの節目にあたっているのである。このような年に新たな試みとして『歴史資料室年報』を創刊できたことを嬉しく思う。

今後は本年報を当室が所蔵する多摩各地の地域資料の魅力を広くお伝えする冊子としてフル活用していきたい。とくに、既存の収蔵資料検索システムやデジタルアーカイブでは未公開の資料について、各資料の紹介や目録公開などによる情報発信をこれまで以上に促進できればと考えている。

本年報は当初、2023年5月31日に『多摩のあゆみ』第190号と同時発行の予定で創刊準備を進めていたが、諸々の作業の遅延から結果的に3ヶ月遅れの第191号と同時発行になった。来年の第2号からは予定日発行を目指し、編集作業や原稿執筆に取り組んでいく所存である。

歴史資料室の諸活動に対して大方の御批正を賜れば幸甚である。

歴史資料室年報 2022 創刊号

2023（令和5）年8月31日発行

編集・発行

公益財団法人たましん地域文化財団
歴史資料室

〒186-8686
東京都国立市中1-9-52

TEL 042-574-1360

FAX 042-526-7788

E-mail info@tamashin.or.jp

**The annual bulletin of
HISTORICAL MATERIALS ROOM**

2022

Tamashin Culture Foundation